

小・中・高・大を連携し、すべての英語教育の"今"を知る。

英語情報

2017
夏号
SUMMER

〔特集〕英語教育推進リーダー中央研修 その成果と課題



沖縄県 宜野湾市立大山小学校
上江洲 育子 先生

栃木県 真岡市立大内中学校
村上 正行 先生

秋田県立秋田南高等学校中部
吉澤 孝幸 先生

沖縄県立小禄高等学校
グレイ 雅美 先生

英検

公益財団法人 日本英語検定協会

小・中・高・大の英語教育の“今”を『英語情報』がお伝えします。

新学習指導要領の全面実施に向けて、

これまで以上に、児童生徒主体の言語活動を中心とした授業が求められ、

小・中・高・大をつないだ英語教育改革が進行しています。

『英語情報』では、国の動向から小・中・高の授業改善の取り組み、

大学の入試改革やグローバル化まで、英語教育の最新事情をお届けします。

明日からの授業づくりや指導にどうぞお役立てください。

Information

「英語で授業ができるか不安」「言語活動の具体例が知りたい」

そんな先生方のために

『英語情報 AR』アプリで誌面で紹介した授業の動画を視聴できます。

今号の動画は、発行日より3カ月間（予定）ご覧いただけます。

英語
情報

英語情報 AR



無料!

STEP
1

アプリをダウンロードします。(無料) (iOS/Android対応)

スマートフォンかタブレットを用意して、



または



から「英語情報 AR」と検索し、ダウンロードします。

STEP
2

アプリを起動し、画像をスキャンします。



本誌記事中の **AR** マークの付いた画像が **枠内に収まるようにスキャン** します。

STEP
3

動画が再生されます。

「スキャン完了」と表示されると、動画が始まります。

一度スキャンした動画は「履歴」をタップすれば、いつでも動画をご覧いただけます。

※ iPhone/iPad → iOS 7.0 以上、
Android → ver. 4.0 以上。

Android版は一部対応していない端末がございます。
インストール画面の動作確認端末をご確認ください。

※ カメラのピントが合わなかったり、光が反射したりすると、読み込みができない場合があります。

※ 読み込まない時は、カメラ位置を少し上下させて読み込み距離を調整してください。

※ 読み取りに時間がかかる場合はアプリを再起動し、再スキャンをしてください。

※ 動画の再生にはネットワーク環境が必要です。Wi-Fi、またはLTE環境を推奨しています。



04



16



46



46

02 最新情報

02 NEWS & TOPICS

04 特集

04 「授業改善を考える」

英語教育推進リーダー中央研修 その成果と課題

文部科学省 初等中等教育局 視学官 平木 裕

10 特集事例 CLASS REPORT

〔高等学校編〕

「英語教育推進リーダー中央研修」での学びを 授業づくりや評価に生かす

沖縄県立小禄高等学校 教諭 グレイ 雅美

〔中学校編〕

目の前の生徒の実態に合わせた指導で 生徒の「want」を引き出す

栃木県 真岡市立大内中学校 教諭 村上 正行

〔小学校編〕

「英語教育推進リーダー」としての使命感を持ち 新学習指導要領の周知に努める

沖縄県 宜野湾市立大山小学校 教諭 上江洲 育子

16 授業改善

16 〔連載〕安河内 哲也先生が聞く【第12回】

明日から使える! 英語で授業 7つの鉄則

〔AR〕秋田県立秋田南高等学校中等部 教諭 吉澤 孝幸

22 〔連載〕新教育課程に向けて

〔高等学校編〕【第2回】

技能統合型授業におけるライティングの指導と評価

明治学院大学 文学部 准教授 杉田 由仁

〔中学校編〕【第2回】

表現力や発信力を高める授業づくり

信州大学 学術研究院 教育学系 教授 酒井 英樹

〔小学校編〕【第2回】

外国語教科化における文字指導のあり方

愛知県立大学 外国語学部 准教授 池田 周

28 大学入試・高大接続改革を見据えて

28 〔NEWS〕文部科学省が

「大学入学共通テスト(仮称)」の 実施方針(案)を発表

30 TEAP Hot News!

第7回 TEAP 連絡協議会レポート

34 TEAP 利用入試 学生座談会

なぜTEAPを選び、 どのような英語力が身に付いたのか

36 〔EVENT REPORT〕

「広島大学進学ガイダンス&安河内哲也先生による 英語勉強法特別講義」を開催

38 国際化の取り組み

38 Super Global High School 【第12回】

高評価の指導体制「出雲モデル」で 地域・社会のリーダーを育成し続ける

島根県立出雲高等学校

40 指導のヒント

40 〔連載〕「学習到達目標と指導・評価の一体化」を目指して【第2回】

琉球大学 教育学部 准教授 深澤 真

42 〔連載〕英検4級・5級で広がる英語の世界【第2回】

鹿児島純心女子大学 国際人間学部 教授 川上 典子

44 〔連載〕英検2級の「壁」を超えるための授業実践【第2回】

北海道札幌国際情報高等学校 教諭 木村 純一郎

46 Pick Up! 英語教育

46 〔連載〕全英連新潟大会に向けて

新潟から世界へ! 新潟から未来へ!

～交流・喜び・成長あふれる英語教育の推進～

新潟県立高田高等学校 校長 小野島 恵次(新潟大会 実行委員長)

名古屋外国語大学 教授 太田 光春(新潟大会 記念講演 講師)

50 〔EVENT REPORT〕

平成28年度 実用英語技能検定

成績優秀者・優秀団体表彰式を開催

52 教員研修

52 2016年度 英検協会 英語教員海外研修

帰国後の取り組み報告

●高等学校

兵庫県立尼崎小田高等学校 教諭 中安 真敏

●中学校

大阪府 寝屋川市立第七中学校 教諭 今森 萌

●小学校

栃木県 鹿沼市立西小学校 教諭 広瀬 文彦

54 わたしのオススメ本

NEWS & TOPICS

英語学習指導などに役立つ最新情報をお届けします

INFORMATION

英検準2級・3級ライティングテストは 4つの観点で採点されます！

2017年度第1回から、実用英語技能検定（英検）準2級と3級にライティングテストが導入され、一次試験では右のように変更があります。詳しくは、英検ウェブサイトをご覧ください。

https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/2017outline_p23w.html

- ◆ 語句整序問題は削除
- ◆ 筆記試験の時間を10分延長（準2級：65分→75分、3級：40分→50分）
- ◆ 測定技能の増加（RLに加えてWも一次試験で測定し、スコアを提示する）
- ◆ CSEスコアの基準値の変更（準2級：満点1800・一次合格スコア1322、3級：満点1650・一次合格スコア1103）

【採点の観点とアドバイス】

解答は以下の4つの観点で採点されます。観点ごとに0～4点の5段階で評価され、得点の満点は16点となります（CSEスコアの満点は準2級：600、3級：550）。観点別のアドバイスををご紹介しますので、解答作成時のご参考にしてください。

観点		アドバイス
①内容	課題で求められている内容（意見とそれに沿った理由2つ）が含まれているかどうか	自分の意見と合わせて、その理由を明確にし、意見を支える論拠や説明がより説得力のあるものになるように、具体的な例も書きましょう。なお、意見は1つに絞って書いて論理を深めるようにし、逆の意見を支持する理由などは書かないようにしましょう。
②構成	英文の構成や流れが分かりやすく論理的であるか	伝えたい情報の流れや展開を示す表現（接続詞など）を効果的に使って、自分の意見とその理由や英文全体の構成をより分かりやすくしましょう。意見や理由と関係のない情報を書くことで、英文の流れが分かりにくくなることもあるので気を付けましょう。
③語彙	課題にふさわしい語彙を正しく使っているか	正しいつづりや意味で使われているかを意識しながら、自分の意見とその理由を十分伝えられるようにしましょう。なお、英語以外の言葉を使う場合は、その言語を知らない人でも理解できるように、説明を添えましょう。
④文法	【準2級】文構造のバリエーションやそれらを正しく使っているか 【3級】文法的に正しい英文が書けているか	【準2級】同じような形の文の繰り返しにならないように、多様な文のパターンを適切に使用して、自分の意見とその理由をより効果的に伝えられるようにしましょう。また、文単位で書くことを意識し、So much fun.やBecause it is fun.のように不完全な文を書かないように気を付けましょう。 【3級】文法的に正しい英文を使用し、自分の考えとその理由をより効果的に伝えられるようにしましょう。

英検準2級・3級ライティングテスト用の教材をご活用ください

英検準2級と3級にライティングテストには、どのような問題が出題され、どのように解答すればよいのか。また、どのように指導すればよいのか。英語教育に携わる皆様の声にお応えして、英検協会では、楽しく学べるライティングテスト用教材「Dr. Writeの英検準2級ライティングテストに挑戦!」「Dr. Writeの英検3級ライティングテストに挑戦!」を制作し、ウェブサイト上で公開しています。学習や指導にぜひご活用ください。

◆ Dr. Writeの英検準2級ライティングテストに挑戦! (準2級)

http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/grade_p2/pdf/DrWrite_grade2.pdf

◆ Dr. Writeの英検3級ライティングテストに挑戦! (3級)

http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/grade_3/pdf/DrWrite_grade3.pdf

3級ライティング用教材のサンプル

答え方の「型」を覚える

英文を書くには、「型」が役立ちます。一言、二言の「型」を覚えてしまえば、いろいろな文法問題に活用することができます。

自分の「型」

My favorite season is ().

I have two reasons.

First, ().

Second, ().

理由①

理由②

最初に「自分の型」を覚えます。自分の型に合うような文を自分で考えてみましょう。次に、「I have two reasons」と理由が2つあることを示します。そして、1つ目の理由を「First, ...」と述べ、続いて、2つ目の理由を「Second, ...」と述べていく必要があります。「型」の部分が空欄になっているので、「自分の型」や「理由」の書き方を覚えてください。

Dr. Write

ライティングのコツを分かりやすく解説します!

準2級ライティング用教材のサンプル

実用英語技能検定 (英検) 2017年度試験日程のご案内

英語教育改革が進むなか、大学や高等学校入試において、英検をはじめとする外部の資格・検定試験の活用が推進されています。また、英検を団体受験される中学校や高等学校より、部活動の公式大会や学校行事等と試験日程が重複して受験できない場合に、別日程での受験を望む声が寄せられています。英検協会では、2017年度から英検の二次試験の日程を下記のように2日間設定し、中学生や高校生の受験機会を増やしました。大学入試や高校入試における英検のスコア提出に対応するため、中学校・高等学校の団体受験者には入試出願日程に間に合うよう、成績表が早く届くA日程での試験日を設定しました。また、団体受験(A日程)では日程が合わない中学生・高校生の志願者については、個人で申し込みいただくことにより、別日程(B日程)を選択することができます。試験日程や詳細については、英検ウェブサイトをご覧ください。
<https://www.eiken.or.jp/eiken/schedule/>

■ 2017年度 実用英語技能検定 試験日程

試験日程	第2回検定	第3回検定
受付期間	8月7日(月)~9月15日(金) 〈書店締切:9月8日(金)〉	11月21日(火)~12月20日(水) 〈書店締切:12月13日(水)〉
一次試験	本会場	2018年 1月21日(日)
	準会場(全ての団体)	2018年 1月20日(土)、21日(日)
	準会場(中学・高校のみ)	2018年 1月19日(金)
二次試験	A 日程	2018年 2月18日(日)
	B 日程	2018年 2月25日(日)

英検テストファミリー (英検、英検IBA、英検 Jr.) 2016年度 総志願者数は、3,393,520名!

2016年度、英検テストファミリーは、総数3,393,520名にのぼる志願者にご利用いただきました。未就学児から成人まで、全世代での均等な割合で志願者数の増加がみられます。英検協会では、今後も英語力向上をめざす全ての方々に英検テストファミリーをご活用いただけるよう努めてまいります。

※英検テストファミリーは、実用英語技能検定(英検)、英検IBA、英検 Jr. の総称です。

2017年度のTEAP CBTは 年2回実施に!

「TEAP CBT (Computer Based Testing)」はICTを活用し、複数の技能を統合的に運用する能力や実践的な英語力を測定することができるテストです。2016年10月に初めて、東京と大阪の2都市で実施し、総志願者数は509名でした。今後の試験開催都市の拡大を見据えて、2017年度は年2回実施とし、スピーキングテスト形式を「対面式」から「録音式」に変更いたします。

TEAP CBTの2017年度実施概要は次の通りです。

■ 2017年度 TEAP CBT 実施概要

試験日程	試験実施日		受付期間
	第1回	9月3日(日)	6月22日(木)~8月9日(水)
	第2回	10月22日(日)	8月14日(月)~9月28日(木)
試験開催都市	東京、大阪		
受験資格	高校2年生以上 ※スコアの有効期間: スコア取得の翌年度末まで (取得年度および翌年度の大学入試に利用できます)		
受験パターン 種類 受験料	4技能(R/L/W/S): 15,000円(税込) 2技能(R/L): 6,000円(税込) ※R: リーディング、L: リスニング、W: ライティング、S: スピーキング		
申込方法	インターネットによる申込 ※TEAP IDをお持ちの方は、同じIDでお申し込みいただけます。		

TEAP CBTは、大学入試に活用できる「英語外部検定試験」として、2017年5月現在、上智大学(一般入試 TEAP 利用型)をはじめ、立教大学(センター試験利用入試)や東京女子大学(一般入試 英語外部検定試験利用型)、聖心女子大学(AO入試)、東洋英和女学院大学(公募制推薦入試)などで採用が決まっており、TEAP CBT 採用大学は今後も拡大していく予定です。

試験内容や採用大学などに関する詳細は、TEAP CBT ウェブサイトにてご確認ください。

TEAP CBT

検索

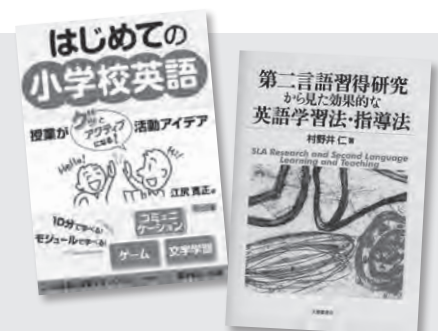
お問い合わせは、英検サービスセンター(TEAP 運営事務局)へ。
TEL. 03-3266-6556 (平日9:30~17:00 ※土・日・祝日を除く)



PRESENT!

英語教育関連書籍2冊を 各1名様にプレゼント!

英語教育に関する書籍2冊を、抽選で各1名様に差し上げます。本誌に関するアンケートにお答えいただき、ご希望の書籍番号をご明記のうえ、『英語情報』編集部までご応募ください。詳細はP.54をご参照ください。



[中・高等学校]

中央研修のねらい

英語を用いた「コミュニケーション」中心の指導方法を修得し、
英語担当教員等の英語指導力を向上させる。



社会でのグローバル人材の育成が喫緊の課題とされ、文部科学省は2013(平成25)年12月、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、小・中・高等学校を通じた英語教育改革を段階的に進めてきた。なかでも、「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」の一環として、2014(平成26)年度より5年間の予定で実施している「英語教育推進リーダー中央研修」はどのような目的があり、現時点でどのような成果と課題が見えてきたのか。文部科学省初等中等教育局の平木裕視学官と、国際教育課外国語教育推進室の小野美智子事業推進係長、国立教育政策研究所の市川信子学力調査官にお話を伺った。

なぜ中央研修を行うのか

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、「指導体制の整備」を重視している。「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」は、「小学校体制整備」と「中・高等学校体制整備」を進めるための事業であり、2014年度より、英国の公的機関であるブリティッシュ・カウンシルに委託して、英語教育推進リーダーを養成する「国による研修」と英語教育推進リーダーを活用した「都道府県・政令指定都市教育委員会による域内研修」を2つの柱としてきた。

なかでも「英語教育推進リーダー中央研修(以下・中央研修)」は、小・中・高等学校各段階における英語教育推進リーダーを養成するために国が実施する中央研修だ。研修修了者は、研修指導者(英語教育推進リーダー)として認証され、地域で中核となる小学校教員や中・高等学校の英語担当教員へ

の研修、授業指導・学習評価の改善のための指導と助言を行う。その目的は、小学校の中核教員、中・高等学校の英語担当教員、そして外国語指導助手(ALT)の英語指導力を向上させることにある。

小野事業推進係長は、「中央研修」の目的について「新学習指導要領では、小学校で外国語活動が中学年で実施、高学年で教科化されることになりました。その支援策の1つとして、教員の指導力向上があり、英語教育推進リーダーが中央研修を通じて学んだ内容を各校の中核教員へ、そして中核教員から各校の教員へと伝播していくことをねらいとしています。また、中・高等学校は、『授業は英語で行うことを基本とする』と示されています。教員の英語力と生徒の英語力双方に課題がありますが、教員の英語指導力向上のための対策として、本事業を行っています」と説明する。

その成果と課題

英語教育推進リーダー中央研修

特集「授業改善を考える」

[小学校]

中央研修のねらい

小学生に合わせた指導方法を修得し、
中核教員をはじめ、全小学校教員の英語指導力を向上させる。



外部専門機関と連携した英語指導力向上事業の2つの柱

文部科学省資料より

教育再生実行会議
第三次提言
(H25.05.28)

第2期教育振興
基本計画
(H25.06.14)

グローバル化に対応した
英語教育改革実施計画
(H25.12.13)

英語教育の在り方に関する
有識者会議 報告
(H26.09.26)

中央教育審議会
答申
(H28.12.21)

外部専門機関と連携した英語指導力向上事業

国による英語教育推進リーダーを
養成する中央研修

都道府県等教育委員会による
英語教育推進リーダーを活用した域内研修

<英語教育推進リーダーの役割>

- ①各地で中核となる小学校教員や中・高等学校の英語担当教員の研修講師
- ②研究会、研究授業等における講師、助言者
- ③校内研修、授業・評価の改善のための日常的な指導・助言

中央研修と研修実習を経て 「英語教育推進リーダー」として認証

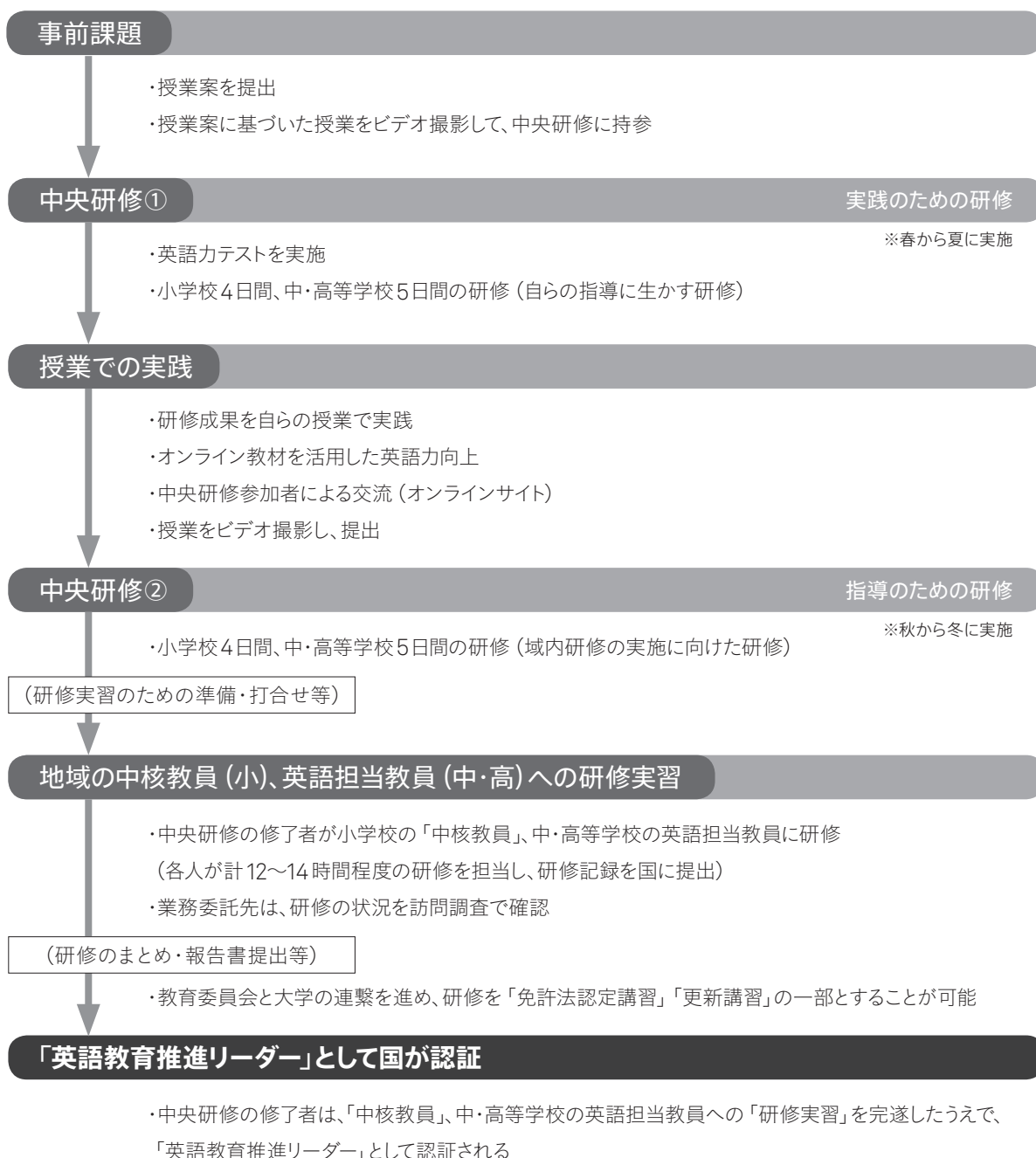
「中央研修」は、2014年度より2018年度までの5年間程度をかけて実施され、1年間で小学校約200名、中学校約180名、高等学校約120名の合計約500名を養成する。5年間をかけて、小・中・高等学校いずれも約1,000名の英語教育推進リーダーを養成することをめざしている。

中央研修を受講するのは、全国の各都道府県・政令指定都

市教育委員会から、地域の英語教育推進の中心的役割を果たす優秀な者として推薦された教員だ。1年間にわたる中央研修を受講し、その後1年間で、12～14時間程度の研修の講師を地域で務め、適切な内容の研修が行われたことが確認されると、「英語教育推進リーダー」として認証されることになる。

「中央研修」は次のように進行する。

「英語教育推進リーダー中央研修」の進行イメージ



中央研修では何を学ぶのか

中央研修は、茨城県つくば市の教職員支援機構等で実施され、小・中・高等学校いずれも、基本的にはすべて英語で行われる。約25名を1グループとして、1グループに対してブリティッシュ・カウンシルの講師1名が担当する。講師は英語教授法に関する修士号相当の資格を有するネイティブ・スピーカーであり、ブリティッシュ・カウンシルによって開発された教材を用いた、アクティブ・ラーニング型の研修を行っている。このような研修を受講するにあたり、各都道府県・政令指定都市教育委員会には、「小学校は英語での研修についていくことができる方、中・高等学校は実用英語技能検定準1級以上等を取得している方を推薦していただくように依頼しています」と、小野事業推進係長は説明する。

市川学力調査官は、自身も「中央研修」を受けた経験を持つ。そして、研修内容について、「前半の『中央研修①』は、研修生が生徒として研修を実体験し、英語のみで授業を運営していく方法や学習者の意欲を高める効果的な言語活動について学びました。後半の『中央研修②』は、地域で研修を運営し、講師として伝達するためのトレーニングを行いました。少人数グループでマイクロ・ティーチングを何度も行い、研修生同士が互いの指導を見合うなかで、研修講師としての指導の技術を学んでいきました。『中央研修①』の後は、勤務校で研修内容を実践してみて、自分の授業改善に取り組みます。授業で実践することで、生徒の表情が変わるのを目の当たりにしたと

き、研修の成果を実感することができました」と振り返った。さらに「授業で役立つさまざまなアクティビティを体験でき、受講者同士の交流を通じて、勤務校へ戻ってからもお互いに、授業づくりや生徒指導などについての情報交換をすることができるという、有意義な研修でした。私の勤務校で課題とされていたスローラーナーへの指導について、生徒の学びの可能性を信じ、日本語を介さずに文脈のなかで単語の意味を理解させるという手法を学び、指導に生かすことができたのも良かったと思います」と述べた。



市川 信子 学力調査官

中央研修 3つの特徴

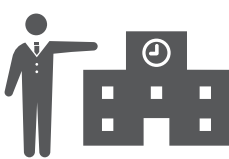
ブリティッシュ・カウンシル資料より

体系を学ぶ



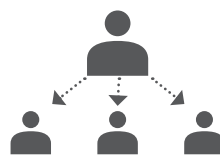
効果的な指導法を自ら生徒役となり体系的に学ぶ

実践してみる



学んだ指導法を模擬授業や自身のクラスで実践

伝達する



研修を受けた教員が全国各地で講習を実施

アクティブ・ラーニングをベースとした研修内容

協働型で双方向

マイクロティーチング

学習者からの視点で

英語で行われる
授業を体験

実践共有の機会

中央研修の成果と課題を今後に生かすために

今年度で4年目を迎えた中央研修について、平木視学官は「中央研修を受講した先生方は、授業で自身が英語を使う機会が大幅に増えているといい、授業を改善し、児童・生徒が変わっていく姿を目にして、手応えを感じているようです」と現時点での成果を語る。受講者へのアンケートを取ったところ、例えば中学校教員は「英語での説明や指示に対して抵抗感がかなり少なくなった」、「自分の学校の生徒には難しすぎるのではないかと考えていましたが、生徒から『分かりやすかった』『楽しかった』『またやりたい』という感想をたくさん聞き、うれしかった」「今までの英→日（日→英）の覚えさせ方より、



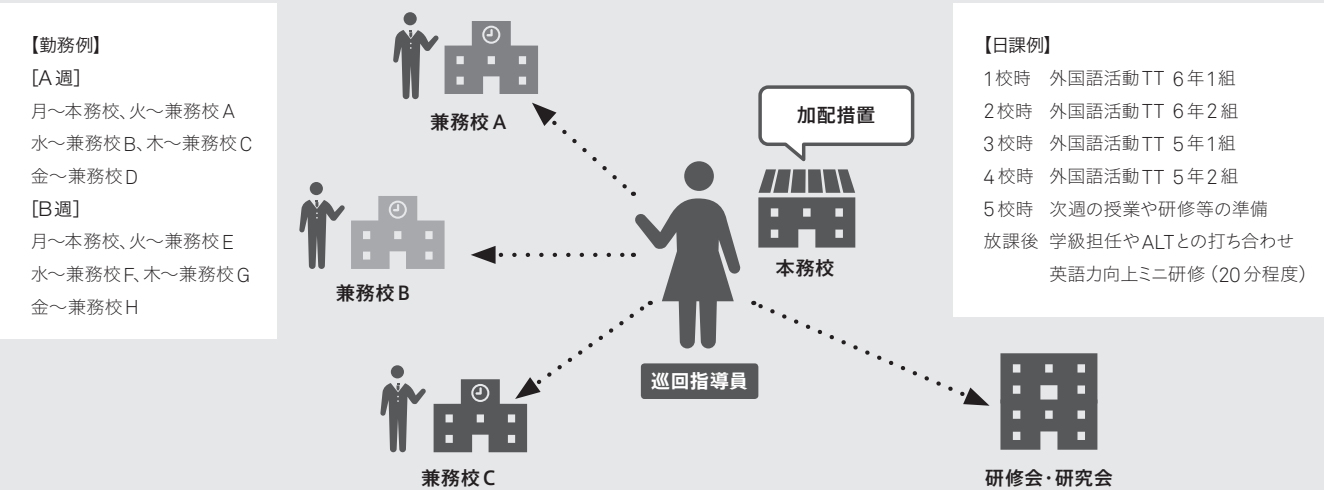
小野 美智子 事業推進係長

数段生徒の表情が良くなり、積極的に取り組むようになった」「授業規律の徹底から始めた英語の授業で、今ではさまざまな活動ができるようになり、教師側の変化がいかに大切かをかみしめている」といった声が上がったという。また、教育委員会からは「研修実習を行った先生方は、積極的に取り組んでいる」との声も聞かれた。

こうした成果が上がる一方で、次のような課題もある。小野事業推進係長は「中央研修を受講して刺激を受け、授業改善に取り組もうと意欲を見せていた先生方が、実際に勤務校に戻ったときに、周りの先生方との温度差を感じるようです。小学校は必ずしも全ての先生の意識が高いとは言えないのが実情だ」という声もあります。中央研修を受講した先生方の意欲がそがれないようにするためにも、各都道府県・政令指定都市の教育委員会による支援は重要だと思います」と述べる。

今後は、研修実習も終えて、英語教育推進リーダーの認証を受けた先生方をどのように地域で活用していくべきかを考えていく時期に入る。例えば、教育委員会の指導主事のサポート役となり、地域内の学校を訪問し、授業参観と指導助言をするといった役割を果たすことも考えられる。小野事業推進係長によれば、すでにそのような体制を築いている県の取り組みも報告があるという。

「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 「外国語活動巡回指導教員による小学校教員の指導力向上」～ある自治体の取組事例～



巡回指導教員の主な業務

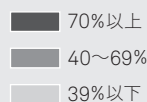
【学級担任とのチーム・ティーチング】 ・T1としての指導の在り方やALTとのかわり方について実践をとおして提示 ・T2として授業にかかわり、T1の改善点について授業後に助言	【模範授業】 ・巡回指導教員1人による指導またはALT等とのチーム・ティーチングを実施 ・第5、6学年の学級担任だけでなく、全教員が参観し、教員全体の指導力を向上	【授業づくりにかかわる支援】 ・「Hi, friends!」の活用の仕方について支援 ・教材の提供やデジタル教材の効果的な活用
【研修の実施】 ・本務校及び兼務校において外国語活動に係る校内研修を実施 ・クラスルームイングリッシュの活用 ・アクティビティ等の効果的な活用	【各種研修会・研究会での講師】 ・市町村教育委員会等が主催する研修講座等の講師 ・市町村の教員全体を対象にした授業公開	【その他】 ・小学校教員の指導力及び英語力の向上に資する研修資料の発行 ・兼務校における優れた実践を本務校や他の兼務校に普及

各都道府県で、どのような研修を行い、英語教育推進リーダーと連携すべきか

今年4月に発表された文部科学省の「平成28年度 英語教育実施状況調査」では、『CAN-DOリスト』形式の学習到達目標の設定状況等や「授業における英語担当教員の英語使用状況」などにおいて、地域による差が大きいことが明らかになった。今後は、このような地域差を埋めていくためにも、英語教育推進リーダーの活用が期待される。また、各都道府県は「英語教育改善プラン」を策定し、目標値を設定している。

最後に、小野事業推進係長は「文部科学省のホームページでは全都道府県の英語教育改善プランと目標管理書を公表しています。各都道府県では、他県の取り組みを参考に、どのように英語教育改革を進めていくのかをご検討いただければと思います。そして、どのような研修を行い、どのように英語教育推進リーダーと連携していくのかを参考にしていきたいと思います」と述べた。

授業における英語担当教員の英語使用率



文部科学省資料より

新学習指導要領を見据えて研修内容も新たなものに

小・中学校の新学習指導要領も公示され、今年度の小学校の中央研修は、新学習指導要領に基づいた内容になるという。今年度中に文部科学省から新教材が提供される。中央研修でも実際に新教材の内容を活用した研修等を行うことを

予定している。中央研修でも実際に新教材を活用して授業案を作成し、模擬授業を行うことなどを予定している。

小野事業推進係長は「小学校は英語の教科化に向けて、音声と文字を関連付けた指導や、初期段階の文字の指導、新教材の活用、『Hi, Friends!』との関連など、より具体的な研修になると思います」と話す。

そして、平木視学官は「中学校では授業を英語で行い、即興性のあるやり取りを取り入れた、生徒同士のコミュニケーションの場面をどのように設定するかといったことが注目されています。また、高等学校は、中学校でも授業を英語で行うことになるので、同じスタンスで授業を展開できるようになります。生徒が英語に触れる機会をより充実させ、授業を実際のコミュニケーションの場面にしていくことが求められます。研修内容も新学習指導要領を見据えた内容になるでしょう」と語った。



平木 裕 視学官

「英語教育推進リーダー中央研修 DVD教材」を活用して校内研修の充実を

文部科学省とブリティッシュ・カウンシルは「英語教育推進リーダー中央研修 DVD教材」を制作し、各都道府県教育委員会をはじめ、全ての小・中・高等学校へ配付している。このDVD教材は、「英語教育推進リーダー中央研修」の内容の伝達を補完するために制作され、実際の授業での事例等を紹介する内容だ。本誌P.10-11で紹介した、沖縄県立小禄高等学校のグレイ雅美先生（収録当時は同県立北山高等学校）と、P.12-13で紹介した栃木県真岡市立大内中学校の村上正行先生（収録当時は同県市貝町立市貝中学校）の指導の様子が視聴できる。平木視学官は「校内研修や研修実習を行う際、『平成27年度DVD教材』と『平成26年度DVD教材』を合わせて視聴することにより、研修内容のポイントをより深く理解することができます。本教材の趣旨を踏まえ、ぜひ研修にご活用ください」と呼び掛けている。





「英語教育推進リーダー中央研修」での学びを授業づくりや評価に生かす

沖縄県のグレイ雅美先生は、長年にわたり生徒主体の言語活動中心の授業実践を積み重ね、学習意欲がそれほど高くない生徒たちを英語好きに変え、導いてきた。2012年には、優れた授業実践が評価されて、沖縄県英語立県推進戦略事業による初代「沖縄県英語マイスター」に選ばれ、2014（平成26）年度には「英語教育推進リーダー中央研修」を受講。すでに還元研修も経験している。今年度からは沖縄県立小禄高等学校に着任し、生徒や教員との新たな関係を築きながら、自らがめざす授業づくりに邁進している。研修で学んだ内容を自らの授業に生かし、実践している様子を取材した。

【本時の目標】

- ・ Students will be able to have interests in different ways to celebrate New Year.
- ・ Students will be able to talk (write) about the New Year in Mongolia and their nomadic life.

【教材名】

Lesson 2 New Year's celebrations
より Section 1 (Mongolia)
『My Way English Communication II』
(三省堂) (全7時間中1時間目)

2. Group Talk

席を立ち、生徒同士でお互いの誕生日を尋ね合いながら、同じ誕生日ごとにグループを作る。



4. Skimming

グレイ先生が教科書の Section 1 の Paragraph 1 を音読し、生徒たちは Skimming に取り組み、世界のどこでも新年を同じように祝うのかについて考える。



0min

1

2

3

4

5

グレイ先生の授業の様子は
こちら



1. Greeting

本時の学習につなぐ導入。カレンダーの絵から、Year / Month / Day の英語表現を見つける。さらに、ペアで “When is your birthday?” “It is ...” と聞き合う。



3. Group Talk 2

各グループで “What is special about your month?” について話し合う。各月の行事を黒板に書き出し、日本独自の行事と日本では祝わない行事に分ける。

生徒が主体的に学ぼうとする姿勢を育み 自ら考える授業づくり

グレイ先生は単元の導入時に、英語が苦手な生徒が「追いていかれている」と感じることなく言語活動に入ることができるよう、中学レベルの英語を用いることを心掛けている。そうして、生徒が簡単に理解できる内容から本時のトピックへつなぐ。本文の内容理解では、答えが1つにならない質問を投げ掛け、生徒と対話したり、ペアやグループで活動させたりしながら、生徒の考えを引き出し、理解を促す。「生徒がワークシートに記入する際にも、正解を限定しません。内容が理解できていればよいのです。そして、ワークシ-

ートの最後には、もう一度本文を読み返さなければ答えることができない質問を投げ、学びを深めていきます」と説明する。

授業では、本文をただ読み進めるのではなく、生徒が考えながら読むことを大切にしている。「これはなぜか、などと生徒自身が考えて読まなければ、記憶には残りませんから」とグレイ先生。本文を読む際には、生徒が「見ただけでは単語が分からないから読めない」とあきらめてしまうことのないよう、「色だけを探して」「国を探して」と読み取るべき情報を絞って指示する。そうすることで、少しでも「読めた」という感覚を味わってほしいと考え、生徒を褒めることを忘れない。

前任校の沖縄県立北山高等学校では、学習意欲や英語力がそれほど高くない生徒でも、自律して学習に取り組むことができるよう、同僚と協力体制を取りながら、学習到達目標と指導、評価の一体化を図っていた。そうして指導していくうちに、「英語が好きな生徒が増えていった」と話す。さらに、「英語教育推進リーダー中央研修」で学んだことを生かし、「ワークシートを作成する際には、生徒が自分で考えるように導くため、ブランクをできるだけ大きく取るなど工夫をしました」と話す。今年度は勤務校が変わり、これまでとは学校の規模も学力もまったく違う環境下にある。取材当日は、新学期が始まって1カ月足らずだったにもかかわらず



前教科調査官が見るグレイ先生の授業

敬愛大学 国際学部 国際学科 向後 秀明 教授 (前 文部科学省 初等中等教育局 教育課程課・国際教育課 教科調査官)

英語教育推進リーダー中央研修の初年度(平成26年度)受講者であるグレイ先生の授業に、久しぶりに“再会”することができました。今年度異動されたばかりということもあって多少の戸惑い(照れ?)が感じられるものの、確かな指導力、そして目の前の生徒に適切なレベルの英語を自然な雰囲気の中で提供する力をベースに、第二言語習得理論に沿った言語活動で構成された授業展開は前任校時代と変わっていません。例えば、①常に生徒とのインタラクションを図っていると同時に、そこから生徒の理解度を確認している、②言語の使用場面を具体的に設定している(言語の使用に必然性を与えている)、③活動の指示がモデル提示を含めて明確である、④生徒にとって身近な話題から入り、それを教科書の内容にリンクさせている、⑤

視覚的な補助資料を活用しながら、“英語で英語を学習する”ことをリーディングにおいても実践している、といった点に工夫が見られます。

おそらく、新しい学校の状況を確認めながら御自身のカラーを出しつつある過程だとは思いますが、もっと突き抜けていただきたいという期待を持っています。先生が突き抜けないと生徒たちも突き抜けられず、そこそこの英語力で止まってしまう可能性があります。彼らの様子を見てみると、もっと多くのExposure (to English) & Experience (of using English as a medium of communication)が必要だと思われます。時々フォローアップとして挟んでいる日本語も、ほぼ不要です。グレイ先生の御指導に大きな可能性を感じるが故の願いです。

6. Scanning~Jigsaw Reading

ペアでParagraph 2と3をそれぞれ読み、Scanningをする。モンゴルの新年行事 Tsagaan Sarについて、いつ、どのように祝うのかなどを読み取り、記入する。



50min

6

7



5. Skimming 2-3

同様にParagraph 2と3を読み、Skimmingをする。モンゴルで祝う新年行事について、先生と生徒でインタラクションをしながら理解を深める。

らず、すでに生徒たちとの親和関係を築き、いかに、生徒の考えを引き出すか、生徒主体の言語活動を行うか、といったことを実践していた。

中央研修で自身の指導の方向性を再認識

「英語教育推進リーダー中央研修」を受講し、グレイ先生は「実践しようとしていることの方向性は間違っていなかったと再確認できた」と話す。研修当時は、前任校でパフォーマンス評価の導入に動き出した時期だった。それだけに、「新しい取り組みへの不安が払拭された」と振り返る。

これまでに沖縄県で「英語教育推進リーダー中央研修」を受講した高等学校の教員

は6名おり、グレイ先生は2年にわたり、還元研修を行っている。沖縄県での高校教員を対象とした還元研修は、「英語教育推進リーダー中央研修」を受講した6名から2名ずつが、チーム・ティーチングで行っている。「今後は、『英語教育推進リーダー中央研修』を受講した中学校の先生方とも交流して情報交換ができれば、中・高連携が円滑に進むのではないかと考えています。県内の中学校は、授業改善アドバイザーの立場の先生が地域を回って指導助言にあたっていると伺っていますが、私も今後、そうした立場になることができれば、自分の経験や研修での学びを踏まえて、現場の先生の悩みに対して助言



7. Group work

読み取った内容について、グループ内で説明し合う。さらにTsagaan Sarを説明する写真を見ながら、T/F Questionなどに答えて理解を深め、遊牧生活についての考えを話し合い、ワークシートに文で書き込む。

することができるのではないかと思います」

最後にグレイ先生は、今後「英語教育推進リーダー中央研修」を受講する先生に向けて「研修を受けたあとは、域内での還元研修があるので、自分がどのように研修をするのかを意識して、受講するとよいと思います」とアドバイスを送る。そして、「中央研修を通じて九州各地の先生方と知り合い、今でも交流が続いています。同じ立場の先生同士、抱えている悩みは同じで、授業づくりや評価のことなど、情報交換をしています。もし再び参加できる機会があれば、今度は定期テストの作り方について、より具体的に学びたいですね」と意欲を見せた。

目の前の生徒の実態に合わせた指導で 生徒の「want」を引き出す

2017年4月、真岡市立大内中学校へ異動した栃木県の村上正行先生は、前任校での実践をベースに、目の前の生徒の実態に応じた指導を展開している。2015（平成27）年度の「英語教育推進リーダー中央研修」のあとは、より一層、熱心に授業改善に取り組み、地域の先生方への情報発信にも意欲的だ。生徒にも、自身にも、合言葉は「限界突破」。生徒が知的好奇心を震わせて学ぶことができる授業をつくりたいと意気込んでいる。

【本時の目標】

授業の終わりまでに、生徒は

- ①世界の食事に関するクイズを聞き、適切に回答することができる。
- ②日本の食事に関するクイズを考えて、英語で作成することができる。
- ③日本の食事に関するクイズをグループで出し合い、英語で質問したり、答えたりすることができる。

【教材名】

Unit 1～Presentation1「日本文化紹介」

『New Horizon』（東京書籍）（全13時間中11時間目）

2. 世界のクイズに挑戦

世界の食事に関する5つのクイズに挑戦。村上先生が話す英語のヒントを聞き取り、説明や写真を頼りに答えを探る。生徒とのインタラクションを通じて、正解を探し当てる。ターゲットセンテンスを含むまとまりのある英文に触れると同時に、クイズ作成のモデルとなることを目的とする。



0min

1

2

3

4

村上先生の
授業の様子は
こちら



1. Warm-up～1分間トーク

日本の食文化についての1分間トーク。“What is your favorite Japanese food?”をトピックに、ペアで尋ね合う。その後、言いたくても言えなかった表現を拾い上げ、ペアを替えて再度取り組む。



3. ターゲットセンテンスの確認

この日の授業におけるターゲットセンテンスとなる“It is made of...”について、“What is the pattern?”と“When do you use them?”との村上先生の問いに答えながら、使用場面を理解する。

生徒との親和関係をいかに築き 心理的障壁を取り除くかが重要

『英語教育推進リーダー中央研修』を受講し、これまで19年間、第二言語習得を学ぶなどしながら、漠然と追いかけてきたことが、間違いなかったと確信に変わりました」と村上先生は語る。自律的な学習者を育てるには、生徒自身が「want」を感じなければ前進することはできない。そこで、授業では生徒にとって身近な話題を中心とした言語活動に取り組ませる。そうすることで、生徒は表現する意欲を高めるという。また、モデルを多く提示することで生徒に気付かせ、そこから確かな知識へと導いていく。

「生徒が自ら学ぼうとする意欲を引き出すには、まず心理的障壁を取り除く必要があります。友達同士でハイタッチをしたり、拍手をしたりといった身体的な接近感を体験させ、相手にどこまで踏み込めばよいのかを実体験させるのです。身体が触れ合った経験がなければ、いくら言語で触れ合わせても身に付きはしません」と村上先生。授業で心掛けているのは、「チャレンジして失敗した生徒を意図的に褒めること」と言う。「褒めることで、間違えてもいいのだと生徒は理解します。初めは警戒心の強い生徒たちも、互いに認め合う環境のなかで、間違いを恐れずに発言するようになる。こうして生徒との親和関係を築いていく。

だが、時には生徒が答えられないこともある。そのようなとき、村上先生は生徒の様子を見ながら、「質問の仕方を変える」と言う。例えば、教科書のkawaii culture such as Hello Kittyの表現で、生徒はsuch asの意味を捉えられなかった。そこで、“I like Italian food such as...”と言い換えたところ、1名の生徒がPastaと答えた。するとほかの生徒の理解が深まり、Pizzaなどの料理名が始め、理解が教室全体に広がったのだ。日本語でsuch asの意味を教えなくても、生徒たちは英語のまま感覚的に捉えることができた。「生徒が理解できるまではもどかしく、さらに次のことを教えたいとも思いますが、今はまだ教え



視学官が見る村上先生の授業

文部科学省 初等中等教育局 平木 裕 視学官 (文部科学省 初等中等教育局 教育課程課・国際教育課 教科調査官 併任)

『英語情報 2017 春号』の東広島市立松賀中学校同様、ぬくもりのある人間関係に包み込まれた空間が印象的な授業です。そのポイントの1つは、村上先生の話す英語が生徒に伝わる英語であり、常に生徒の理解の状況を確認しながら授業を進めている点でしょう。ちょっとした工夫も多々見られます。例えば、日本食という生徒にとって身近で慣れ親しんでいる話題を取り上げることや、だからこそ発信意欲にもつながりやすいこと、また、ICT (スライド表示) を活用することにより、英語で進行する授業が生

徒に受け止めやすくなっていること、さらには、全体、ペア、グループといった学習形態のバリエーションがうまく組み合わせられていることなどです。そういった点をぜひ参考にしていただければと思います。

ペアやグループでの活動では、生徒が日本語を使ってしまうことが予想される発問 (課題) は避け、英語でやり取りできるように工夫することを今後は期待したいですね。

4. クイズの作成

まず、クイズ作成にあたりルールが説明される。例文をもとに、3人一組のグループで話し合いながら、日本食についての英文クイズを作成し、ワークシートに記入する。



6. 振り返り

「Things I can do」のシートを使って、何ができるようになり、理解できたのか、学習を振り返る。CAN-DO チェックシートで記された技能について意識しながら自己評価し、ペアで話し合う。



50min

5

6



5. クイズを出題する

対戦手順と出題方法を理解し、1分間練習をしたあと、グループごとに対戦し、クイズを出題し合う。出題側の生徒は全員が1センテンスは説明し、解答側の生徒は質問しながら理解する。

るべきときではないとじっとこらえます。前任校で生徒との親和関係を築いたように、この学校でも生徒の知的好奇心が震えるような活動と挑戦を通して、互いの親和性を高めていきたいと思っています」と意欲をのぞかせる。

自分の経験や中央研修での学びを
一人でも多くの先生に伝えたい

村上先生は「英語教育推進リーダー中央研修」で学んだことは、還元研修のほか自主研究会や研究授業、中央研修参加経験者が集まるLEEP[※] Conferenceなどを通じて多くの先生方に共有してきた。「自主研究会では、参加者が撮影してきた授業の動画などを

用い、参加者で検討し合い、互いに知見を広げられるように心掛けています。また中央研修を受けて、地域を超えたネットワークを築くことができたことは財産です」と村上先生。研修受講者とは今なお情報交換を続けている。「書籍を読むのと同様に、私一人では発見できなかった視点に触れて、自分の実践にもよい刺激をいただくことができます。一方で、伝達することの難しさも感じています。教員一人一人、立場も違えば、背負っているものも違うので、『押し付け』にならないよう、参加者自身の気づきやアイデアの共有を大切に、伝達するよう心掛けています」と話した。

これから「英語教育推進リーダー中央研

修」を受講する先生に対し、村上先生は、「主体的な学びの姿勢が大切です。自分が学ぶだけでなく、録音してメモを取るなどして、また伝達することを意識して受講するとよいと思います」とアドバイスを送る。「学びの多い研修なので、積極的に参加した方がよいですよ。私も機会があれば再び参加して、さらに学びを深めたいです」と笑みを浮かべる。

そして「私は英語学習を通して、世の中を自力で泳いでいくことのできる生徒を育てたいと考えています。英語を習得するには、人とのつながり方を理解すること。受信や発信という感覚を養うことが必要です」。村上先生は英語教育への思いを熱く語った。

※ The Leaders of English Education Project

「英語教育推進リーダー」としての使命感を持ち 新学習指導要領の周知に努める

宜野湾市立大山小学校の上江洲育子先生は、沖縄県で唯一の英語教育強化加配教員として、「英語教育推進リーダー中央研修」での学びを自ら実践し、使命感を持って地域に還元している。中央研修受講後は、研修での学びをいかに伝え、理解してもらうかという課題と向き合いながら還元研修を行い、自らの英語力をさらに伸ばし、世界を広げたいと自己研鑽にも努めている。

【本時の目標】

自分の名前をアルファベットの大きな文字で書き、友達にスペシャル自己紹介をしよう

【教材名】

Hello, Friends!!

『Hi, Friends! 1』（文部科学省）

ワークシートは『Hi, Friends! Plus』より
（全8時間中8時間目）

2. Teacher's Talk

音楽専科の先生の自己紹介動画を視聴し、聞き取った内容を書き取る。上江洲先生は“What is the Natsuki-Sensei's favorite food?”などと質問し、児童の発話を引き出した。



4. Review

ABCソングを歌い、黒板に並んだアルファベットを正しく並べる。ワークシートの4線を意識して文字を書き、自分の名前を書く。



0min

1

2

3

4

5

上江洲先生の
授業の様子は
こちら



1. Warm-up

天気や日付などをやり取りして授業開始。4つのルール
① Listen carefully, ② Speak loudly, ③ Have a good manner, ④ Help each otherを確認し合う。



3. めあての確認

この日のめあてを黒板に書き、児童にもワークシートへ書かせたあと、全員で声に出して確認し合う。



5. What is this name? ゲーム

黒板に貼り出された名前の空欄に入るアルファベットを考え、友達の名前を当てる。スペルを意識し、ローマ字との違いを学ぶ。

現場に広がる不安を払拭するために

宜野湾市は、英語教育課程特例校事業として、小学校全学年で「英語」の授業を取り入れている。1年生から4年生までは週1時間、5、6年生は週2時間の授業時数があり、学級担任とALT（JET）、専科教員によるチーム・ティーチングで授業を行う。2016（平成28）年度の「英語教育推進リーダー中央研修」を受講した上江洲先生は、英語教育強化加配教員として、大山小学校での授業参観と助言、チーム・ティーチングでの授業実践のほか、県中部の中頭管内の小学校68校での授業観察や授業づくりの支援、各市町村教育委員会が実施する研修の講師も

務める。そして、学級担任だからこそできる外国語活動のよさを伝え、新学習指導要領のめざす教育内容を周知していくことに使命感を持って活動している。今年度からは還元研修も行い、「英語教育推進リーダー中央研修」で学んだ内容を地域の中核教員へ伝達していく。

「私自身、英語を専門に学んできたのではなく、外国語活動に携わるようになったのはこの5、6年のことです。だからこそ、先生方が新学習指導要領に向けて不安を抱くのも分かります。その不安を払拭できるように、より具体的な実践のイメージを示していくのが、現場の教員で英語教育推進リーダーで

ある私の役割です。これからも国から発表された年間指導計画素案に基づいて、どのように実際の授業で展開できるのかといったことを具体的に伝えていきたいと考えています。中央研修を受講して、Classroom Englishを最大限に活用すれば、英語で授業を進めることができると実感しました。それを実体験として伝えていきます」と意気揚々と語る。

中央研修で学んだことを実践し

ともに受講したメンバーと情報共有

「英語教育推進リーダー中央研修」を受講して、授業を進めるためのヒントを得た。「例えば、子供たちに指示を出すときに、No.1...、



教科調査官が見る上江洲先生の授業

文部科学省 初等中等教育局 国際教育課 外国語教育推進室 直山 木綿子 教科調査官

新学習指導要領では、高学年に外国語科が導入されます。外国語科では、「聞く」「話す」に加えて、「読む」「書く」活動にも取り組むことになります。「読むこと」「書くこと」に関しては、英語の文字の名称の読み方を発音し、活字体の文字と結び付け、4線上に書くことができることを求めています。上江洲先生の授業では、まさにこの部分を扱っていました。「スペシャル自己紹介をしよう」というゴールに向かって、児童は、好きなもののイラストを

添えたネームカードの作成を通して、活字体の文字を読んだり書いたりして、活字体の文字に慣れ親しんでいます。機械的に文字を書いているのではなく、児童は、「自分の名前のつづりを相手に言ってスペシャルな自己紹介をする」という目的のために、カードに丁寧に文字を書いています。このように、「読む」「書く」の活動においても、「聞く」「話す」活動と同様に、「何のために」というねらいを児童に意識させることが大切です。

7. 友達とスペシャル自己紹介をする

カードを見せながら、名前と好きなことを伝え合う。一方的に自己紹介をせず、聞いている側も応答しながら会話を進める。上江洲先生とジェネット先生のデモンストレーションのあと、児童同士のペアで活動する。



9. おわりのあいさつ

手拍子を打ちながら、“Thank you very much. See you next time. Good bye!”と全員で声に出し、最後にジェネット先生と英語でじゃんけんをして、笑顔で楽しく授業を終えた。



45min

6

7

8

9



6. 自分の名前を大文字で書く

スペシャル自己紹介で使うカードを作る。自分の名前を4線にアルファベットの大文字で書き、好きなものやことを絵や文字で表現する。上江洲先生とALTのジェネット先生は机間指導をする。



8. Looking back

めあてを再確認し、振り返りシートに記入。「楽しく、意欲的に活動できたか」「相手を見てしっかり聞いたか」などを3段階で評価し、「気付いたことや考えたこと」を自由記述したあと、発表する。

No.2 ...、No.3 ...と伝えます。ポイントを示すことで、子供たちは今、自分が何をすべきなのかを聞き取って活動することができるのです。最初の集合研修でそれを学んでから、すぐに実践し、今でも続けています」と上江洲先生は言う。中央研修は、これまで授業で取り入れてきたアクティビティを振り返り、価値付けるきっかけにもなったようだ。「特に高学年は、単にゲームやアクティビティで英語に慣れ親しむだけでなく、知的好奇心を高め、心や頭が揺さぶられるような活動でなければ、学びとは言えません。単元のねらいに応じた活動を考えるようになりました」と話す。この日の授業は、アルファベットの大文字を書く活動

が中心だったが、自分の名前や友達の名前をどのように書くのか、クイズをしながらローマ字と英語の違いに気付かせ、自分の名前をより好きになってほしいとの願いも込めている。子供にとって身近に感じられ、意味のあるトピック、活動をしていくことが大事だという。

また、児童に向けて、自身がアメリカでハンバーガーを食べたくてマクドナルドに行ったものの言葉が通じず、苦労しながらも一生懸命に伝えようとし、店員も理解しようとしてくれたことを話している。「英語はコミュニケーションのための言葉であり、コミュニケーションはお互いが伝えよう、理解しようとする気持ちがあって初めて成り立つもの」と、実体

験をもって伝えている。

今でも「英語教育推進リーダー中央研修」を受講したメンバーとは、日々の授業づくりに関与する実践例を紹介し合ったり、英語教育推進リーダーという同じ立場だからこそ共通する悩みを相談し合ったりする。「他府県の先生方とつながりが持てたことがうれしいですね。今年度に参加される先生も、きっと実り多い研修になると思います。そして、自身が還元研修をするときにどのように伝達すればよいのかを意識して参加されるとよいのではないのでしょうか。1つでも多く授業で生かせるヒントを持ち帰っていただきたいと思います」と上江洲先生は話した。

〔連載〕

安河内哲也先生が聞く

英語で授業



7

明日から
使える！

【第12回】

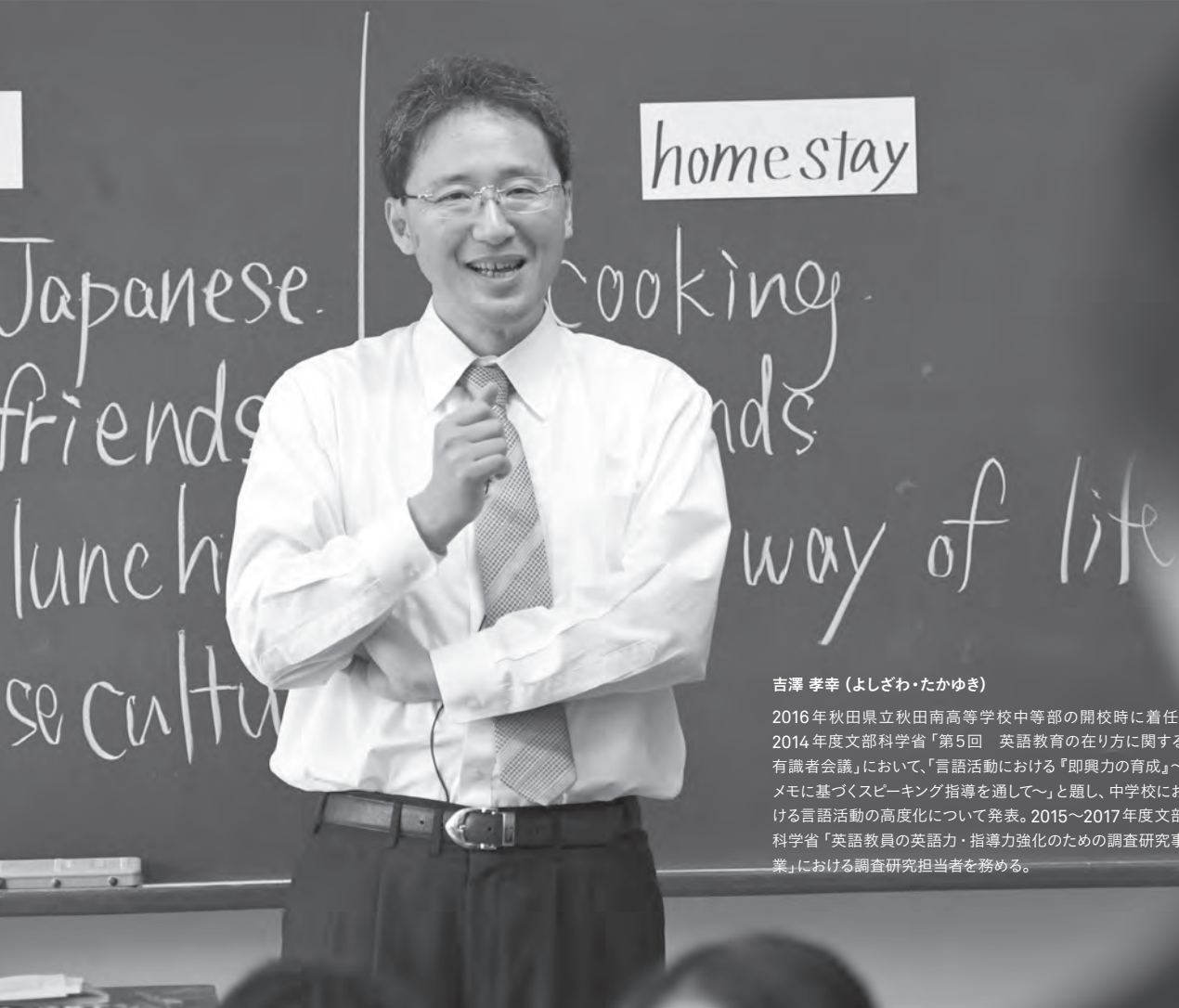
7つの鉄則

安河内 哲也 (やすこうち・てつや)

一般財団法人実用英語推進機構代表理事、東進ハイスクール、東進ビジネススクール英語講師。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」委員を務める。英語学習の楽しさを世に広めるべく、テレビ番組などでも大活躍中。英検1級など英語関連の多数の資格を持つことでも知られる。

秋田県立秋田南高等学校中等部

吉澤 孝幸 先生



吉澤 孝幸 (よしざわ・たかゆき)

2016年秋田県立秋田南高等学校中等部の開校時に着任。2014年度文部科学省「第5回 英語教育の在り方に関する有識者会議」において、「言語活動における『即興力の育成』～メモに基づくスピーキング指導を通して～」と題し、中学校における言語活動の高度化について発表。2015～2017年度文部科学省「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」における調査研究担当者を務める。

教科書を題材に生徒が自分の経験を述べ合う活動で、 生徒の発話を引き出し、思考力・判断力・表現力を養う工夫

「獨立自尊」を校訓とし、SELHiやSGHなど文部科学省の研究指定を受けている秋田県立秋田南高等学校。

長年にわたり、“ナンコー”や“シュウナン”の愛称で地域に親しまれてきました。

2016年4月には、県内4校目の公立中高一貫校として、秋田県立秋田南高等学校中等部が開校し、

世界や郷土を舞台に活躍するグローバルリーダーの育成に力を注いでいます。

中等部の吉澤孝幸先生が授業を英語で行うために実践している7つの鉄則を伺いました。

中学2年生が、英語で自分の考えを話し、友達の話したことを伝え合う活動や、生徒の発話を引き出し、論理的思考力を養う吉澤先生の指導の様子をご覧ください。



本日の授業

中等部2年生

使用教科書: NEW HORIZON 2 (東京書籍) / 単元名: Unit 2 A Trip to the U.K.

吉澤先生の授業の様子は
こちら

導入

自分のことを話し、友達のことを伝える「Talk and Report」

「Talk and Report」は、その場で与えられたトピックについて、自分のことを話し、友達が話した内容を他の人に伝えるグループ活動だ。この日のトピックは“What did you do last night?”. まず、グループ内の斜めの席同士で自分のことを話す。続いて、聞き取った内容を前後で報告する。さらに、前後の席同士で同様に話した内容を横の席同士でも報告し、最後は全体で共有した。



Review

前時の復習から今日の学習につなぐ「Interaction for review」

黒板に貼り出した教科書の内容を表す絵から、登場人物のKotaがしていることを生徒に描写させる。“What is he doing?”との吉澤先生の問いに、“He is writing an e-mail.”と答える生徒たち。吉澤先生は前時の学習内容を生徒とのインタラクションによって復習した。そして、春休みにロサンゼルスを訪れた生徒に、現地で何をしたか、また行きたいかなどと問い掛けては、生徒の発話を引き出していた。その後、自分がゴールデンウィークにしたことをペアで尋ね合い、全体の前で発表させた。



音読

生徒主導での音読練習「Reading aloud」

まず吉澤先生に続いて、生徒たちが教科書を一文ずつ音読する。続いて、グループ内でシャドーイングやRead and Look upなどから、どの手法で音読をするかを話し合って選択し、English Teacherとなる生徒の指示に沿って、他の生徒が音読をする。グループでの活動を終わると、最後は吉澤先生の指示のもと、Read and Look upの手法によって全員で音読をした。



Talking Time ①

キーワードのメモだけで話す力を付ける

教科書の題材に基づき、吉澤先生は修学旅行先のシンガポールで生徒たちが学校訪問とホームステイのどちらをしたいのか、“Which plan do you like?”と投げ掛けた。そして、写真を見せながら現地ですることができることを説明し、生徒に希望を言わせた。さらに、各自でワークシートに選んだ希望と、3つの理由をキーワードだけで書くよう指示した。生徒たちが記入している間、吉澤先生は、“What Japanese are you going to teach?”などと尋ねては、発話を促していた。



Talking Time ②

グループで話し、全体に共有。話してから書く

“Which is your favorite plan?”と問われたら、自分が選んだプランを表明し、“Please tell us your reason.”と聞かれたら、3つの理由を述べる。グループで話し合った後は、全体に共有。全員から“Which is your favorite plan?”と尋ねられた生徒は、“My favorite plan is homestay.”と表明し、“We can cooking. We can make friends. And we can know way of life.”と述べた。授業の終わりには、自分が話した内容を文で書き、ペアで間違いを正した。



鉄則その1

生きた情報を流通させる

授業の冒頭に取り組むグループ活動「Talk and Report」では、その場で与えられたテーマについて、生徒が自分で話したり、友達から聞いた内容を伝えたりしています。この活動で重要なのは、「昨日は朝食を食べました」というようなありきたりなものではなく、生徒自身が経験したことや感

じた気持ちといった「生きた情報」を英語で伝え合うということです。生徒たちは、教科書に出てくる、誰なのか分からない架空の人物の話ばかりではなく、目の前にいる友人たちのことを知りたいと思います。そこで、生徒たちからそうした「生きた情報」を引き出すことで、より楽しく英語学習と

向き合えるようにしています。



鉄則その2

即時的な対応力を鍛える

生徒の発表に対しては、聞き流さずに、必ず反応を返すようにします。話ただけで終わりにせず内容に対して反応を示し、生徒たちにさらなる例証や説明を促すことで、コミュニケーション能力を育んでいきます。会話をすることで、不適切な間や意味のない沈黙が生じては、円滑なコミュニケーションと

は言えません。簡単なつなぎ言葉でもよいので、会話が続くようにするのです。また、教師として、生徒の発話のなかでどのような点について切り込むと、より多くの情報を引き出すことができるのかを、日々、意識するように心掛けています。生徒の発言を生かしきれなかったときには、「授業観察ノート」と名付けた

ノートにうまくいかなかったときのメモを取って、次につなげるようにしています。



鉄則その3

相手の土俵で勝負させる

「話すこと」を「発表」と「やり取り」の2つの領域に分けた場合、ある程度自分で準備して、構成を組み立てて伝える「発表」は、「自分の土俵」です。一方で、予想し得ないタイミングでの相手からの反応に対して、さらなる発話を続けるのが「やり取り」であり、それはいわば「相手の土俵」といえます。授業では、ペアやグループでの活動において、

自分が発話した内容について聞き手から質問やコメントがあった場合に、自分の考えを整理して、英語で組み立てて、音声に乗せて話す「対応力」を養う練習をしています。これは、中学2年生にとって高度なコミュニケーション技術です。そこで、生徒のつぶやきを単語から拾って、文にして言い換えるなどして、英語として形式的な正確さが伴わなく

ても、単語レベルでもどうにかして伝えようとする意欲を生徒が失わないように心掛けています。



鉄則その4

「足場かけ」と「足場はずし」をする

例えば、使える表現をリストにすることが「足場(scaffolding)」です。この「足場」を最初からかけてしまうとPPP(Presentation-Practice-Production)のシステムからなかなか抜け出せません。そこで、生徒にはまず、失敗してもよいので「足場」なしで発話に取り組ませます。もちろん最初はいきませんので、その後で「足

場」をかけ、考えられる表現のリストを生徒に提示します。そのうえでもう一度同じ活動に取り組み、レベルアップした発話ができるようになったところで、また「足場」をはずします。これを繰り返すことで、生徒の英語能力のレベルを高めていきます。ある意味“Language Hungry”とも言えますが、表現が出てこないもどかしさを経験す

ることは、生徒にとって大切なことだと考えます。



鉄則その5

内容的なアプローチをとる

例えば「先週、東京ディズニーランドに行った」という内容を、生徒が英語で「I go to Tokyo Disneyland last week.」と表現した場合、評価としてはA、B、CのAではありませんが、内容は聞き手に誤解なく伝わっているはずです。「形式的にはA評価ではない」ということは生徒に伝えるべきですが、鉄則1の観点からも、まずは「形式」より

も「内容的なアプローチ」を重視します。例えば紙芝居を扱う題材のなかで未来形を扱う場合に、「will」を正確に使えたかではなく、「物語の最後の顛末を予想できたか」を重視するのが「内容的アプローチ」です。ルーブリックによって評価する際、「内容的なアプローチ」という観点が一番高く評価されることは間違いありませんので、生徒たちの

コミュニケーションレベルがどの程度に達しているかを中心に考えながら、授業づくりに取り組んでいます。



鉄則その6

メモに基づいたスピーキングをする

「即興的に話す」ということは、中学生にとっては難しいことなので、「即興的に話す」段階への橋渡しとなる手段が必要だと考えました。これまで「英文を全て書いて、一生懸命覚えて、練習をする」ということに軸足が置かれていましたが、話の流れやまとまりを大まかにイメージして伝えるために、

「単語レベルでメモ書きをして、そのメモに基づいて発話をする」という手法を取り入れました。「メモに基づいて発話する」ということは、自分の考えを組み立てて発信する場合と、読んだり聞いたりといった、受信した内容を要約して伝える場合の2種類があると考えます。発信と受信の両面から訓練をする

ことによって、生徒たちの発話力を育てています。



鉄則その7

書いて自分が使用した英語を振り返る

生徒たちのスピーキングでの英語は、聞き手に伝わりはしても、形式的な観点からすると荒い部分もあります。ライティングの英語では、スピーキングよりも正確さが問われるので、自分がどのような英語を話したかを目で見えて確認して振り返るためにも、スピーキングでの自分の英語を、文で書いて目で見えて確かめ

るようにしています。学校現場では、よく「振り返り」という言葉が使われますが、「よくがんばった」とか「元気な声で話をした」というような、いわゆる言語使用の本質とは違う部分での「振り返り」が多く見られます。新学習指導要領（平成29年3月公示）にも「振り返り」の大切さが記載されていますが、英語の使用その

ものの「振り返り」、つまり、英語の本質の「振り返り」が大事だと考えています。



技能統合型の言語活動中心の授業で高める発話力



授業はコミュニケーションの場

安河内 今日は素晴らしい授業を見せていただき、ありがとうございました。読者の皆さんに、何よりも見ていただきたいのは、生徒たちが楽しそうに英語を話している表情です。今日の生徒たちのような楽しそうな表情が全国に広がっていくと思います。吉澤先生は、何を大切に授業を進めていらっしゃるのですか。

吉澤 1年生の最初の授業では「にっこり笑って大きな声で、相手の目を見て英語で話そう」という日本語のフレーズを、リズムに乗って生徒たちと一緒に言います。それを「英語の授業でのお約束」としています。

安河内 今日の授業では教科書の内容だけに依存せず、生徒が自分の考えを自分の言葉で話しているのが印象的でした。

吉澤 教科書は内容を理解することが目的ではなく、言語活動をするための情報を取る、表現をそこから借りてくるということと捉えています。授業は「コミュニケーションの場」ですから、その生徒しか知らないような「生きた情報」をやり取りすることを重視しています。実際に生徒たちは、日本語での会話では聞かないようなことも、英語での会話であれば恥ずかしがらずに聞くことができ、私的な情報を聞き合うことを喜んでいるようです。

安河内 確かに、日本語では週末に何をしたかなど、あえて聞かないですね。それを英語で聞くことによって、生徒一人一人のいろいろな情報を利用することができるのですね。

吉澤 今日は、教科書の題材にthe

U.K.の話題が出てきましたが、外国に行くということは生徒にとって身近なことではありません。しかし、本校の生徒はシンガポールへの修学旅行があるので、現地で何をしたいかということを話題にしました。教科書はあくまで話題のきっかけ、つまり次の言語活動の入口ということにしています。

安河内 シンガポールの写真を使って説明する場面も良かったですね。今、世界で起きていることを、画面を通じて生徒に見せることも、生きた情報になりますね。ただ教科書を読んで覚えるだけでなく、インターネットから得られるさまざまな情報も活用しているのですね。ちなみに、吉澤先生の授業は言語活動が中心ですが、定期試験ではどのような出題をするのですか。

吉澤 教科書の内容をそのまま出題するのではなく、教科書を題材にした授業中の会話で、教員が教科書の内容から広げて話した内容を英文にしています。

安河内 先生が授業で使用した英語も言語材料として生徒にスクリプトとして配布して、試験で利用するのですね。

中高一貫校の良さを生かして

安河内 吉澤先生の授業はすでに次の学習指導要領で求められるものになっていると思うのですが、いつから今のような授業スタイルを実践されているのですか。

吉澤 自然にたまたま方向が同じようになったというのが実際のところですが、5年ほど前からでしょうか。本校（中等部）には2016年の開校と同時に着任しましたが、それ以前に大仙市立大曲中学校に勤務していたころからです。

安河内 5年前からですか。私もちょうどそのころから英語で授業をするようになりました。こちらの学校は中高一貫校とのことですが、英語科の先生は何人いらっしゃるのですか。

吉澤 中学校と高等学校を合わせて、講師も含めると12名です。中等部は私ともう1名の2名で担当しています。

安河内 中・高が同じ敷地内にあると、連携が取りやすいのではないですか？

吉澤 そうですね。中・高連携は通常ですと、お互いに授業を参観しようとす

吉澤 孝幸 先生

安河内 哲也 先生



ると、研究授業のような場が多く、あるところでは準備された授業を見ることになりがちですが、本校では日常的な自然体の授業を見ることができますので、自分の授業づくりに大いに役立ちます。

4技能型の授業で 育まれる力とは

安河内 先ごろ、2020年度からの大学入試について文部科学省から発表がありました。今日の生徒たちが大学を受験するときには、完全に4技能試験に移行していますね。しかし、吉澤先生は授業ですでに技能統合型の活動をしていますから、生徒たちには実力がしっかりと付くでしょう。実用英語技能検定（英検）のライティングやスピーキングにも対応できると思います。絵を見て描写したり、先生との応答をしたり、自分の意見を述べたりという活動は、英検の二次試験に直結していますね。

吉澤 昨年度から本校では5年間の「中期ビジョン」として、中学3年生までに80%が準2級合格、10%が2級合格、高校3年生までに80%が2級合格、10%が準1級合格という目標を掲げています。大学入試で英検などの外部資

格検定試験の利用が拡大していくことを踏まえて、本校でも英検を受験する機会を設定しています。

安河内 私は予備校で夏の合宿を言語活動中心の授業にしているのですが、今年からさらに4技能型の授業を進めて、参加した生徒には4技能入試を受けるように勧めるつもりです。でも、時代が変わりましたよね。予備校でも4技能型授業ができるようになったのですから。実際に授業では生徒たちもよく話します。ディベートをさせると喜んでいますよ。

吉澤 高校生の全国ディベート大会がありますが、実は秋田県は大会に出場していない県の1つだといわれています。

安河内 そうなのですね。でも、今日の授業の様子を見ると、あの生徒たちならディベートもできそうですよ。メモに基づいたスピーキングをさせていましたよね。それはディベートでも必要な力です。相手の立論をメモしていなければ、^{はんぱく}反駁することができませんから。

吉澤 そうですね。鉄則でもお話ししましたが、授業では話の流れやまとまりをおおまかに捉えて相手に伝えるために、キーワードをメモして、そのメモに基づいて発話をするということをしています。

受信と発信の両面から訓練することが生徒の発話力を高めることにつながると思います。

安河内 実際のコミュニケーションの場面では、スピーチのように準備した内容を話すということはできません。社会では会議やプレゼンテーションなど、準備した内容を話し、それについて聞き手から挙がったコメントや質問に即時的に答えなければならない場面もたくさんありますよね。吉澤先生は生徒とのインタラクションを通して、生徒の発話を生かしながら、さらに発話を促すような問い掛けをしていましたね。今日は明日から実践してみたいと思う工夫が随所に散りばめられていました。とても参考になりました。ありがとうございました。

（文中敬称略）



安河内哲也先生 特別授業

君たちが英語を学ぶのはなぜ？

取材当日、秋田県立秋田南高等学校中部2年生のために、安河内先生が特別授業を行いました。生徒たちは先生が示した①Enjoy making mistakes ②Be self-confident ③Speak in a loud voiceという3つのルールのもとで、終始笑顔で楽しそうに英語でペア活動に取り組んでいました。

最後には、「Why do you study English?」との質問が投げ掛けられ、生徒たちからは「グローバル化が進んで、英語の必要性が高まっているから」「将来、外国でも働けるようになりたいから」「将来、外国に行ったときに英語を話したいから」などの答えが飛び出しました。そして、安河内先生が生徒たちに英語で伝えたのは次のようなメッセージでした。

「なぜ英語を学ぶのか。それは学校のテストのためではありません。英検のためでも、ましてや大学入試のためでもありません。では、英語とは何でしょうか。英語とはアメリカやイギリスの人だけが話す言葉ではありません。中国の人、ロシアの人、韓国の人、アフリカの国々の人、もちろん日本の人、英語を話します。つまり、英語とは1つの国の言語ではないのです。今から500年ほど前、私たちは共通の言葉を持っていませんでした。しかし、今では英語という世界共通語があります。英語を使えば、世界中のいろいろな国の人同士が話すことができます。つまり、英語を使えば、戦争をする前に、憎しみ合う前に、殺し合う前に話し合うこと

ができるのです。英語とはまさにそうした平和を生み出す言語なのです。このような素晴らしい言語を学ぶことができること、英語が世界と君たちを結び付ける言語であることを、ぜひ、これからも忘れないでください。今日は皆さんと英語でお話することができて、楽しかったです。これからも毎日、英語学習を楽しんでください！」



技能統合型授業における ライティングの指導と評価

〔連載〕第2回

技能統合型授業における ライティング活動の分類

明治学院大学 文学部 准教授 杉田 由仁

今回は、技能統合型のライティング活動の分類を行い、高等学校における「思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」について、より具体的に考えていきたいと思います。

技能統合型ライティング活動の定義

前号では、次期学習指導要領が求める思考力・判断力・表現力を育成するためには「外国語で、情報や考えなどを表現し伝え合う能力」を育み「考えの形成、整理」に効果的な技能統合型の授業づくりを行う必要があること、またその中心的な活動として Harmer (2007) の「統合型の言語活動 (integrated tasks)」が位置付けられることを確認しました。今回は、技能統合型ライティング活動を分類して、具体的な指導モデルを考えてみたいと思います。

まず分類に入る前に、今回の答申における「統合型の言語活動（聞いたり読んだりしたことを活用して話したり書いたりする言語活動）」の定義をライティングに特化させておきます。岡・赤池・酒井 (2004) では、高等学校にお

ける技能統合のパターンが図1のような6つのタイプに集約されています。

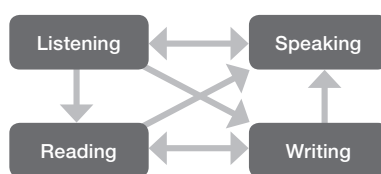


図1:『英語授業力強化マニュアル』2004, p.142を参考に作図

このうち、ライティングの統合例としては、①リスニングとライティングの統合、②ライティングとスピーキングの統合、③リーディングとライティングの統合の3タイプが提示されています。

また、それぞれのタイプの統合例として、①授業などのノートテイキング、電話などのメモ書き、ディスカッションの記録、②スキットの作成と発表、スピーチ原稿の作成と発表、③手紙を読み返信を書く、意見・感想等を書き交換して読み合う、物語を読み感想を

書く、などが例示されています。これらの統合タイプや例に基づき、本稿における「技能統合型ライティング活動」を「聞いたり読んだりしたことを活用して、メモ書きや発表原稿、意見・感想文などを書く言語活動」と定義することにします。

技能統合型授業における ライティング活動の分類

ライティングの「目的の違い」を分類基準にすると、右表のような“Writing for information (WI)”と“Writing for presentations (WP)”という統合型ライティング活動の分類を考えることができます。WIの目的は「自分の情報としてのライティング」であり、WPの目的は「読み手を想定したライティング」という考え方にに基づきます。

思考力・判断力・表現力の育成とい



杉田 由仁(すぎた・よしひと)

山梨県公立中学校教諭、山梨県立看護大学専任講師、山梨県立大学看護学部准教授を経て現在明治学院大学文学部英文学科准教授。博士(教育学)。主な著書に『日本人英語学習者のためのタスクによるライティング評価法』(大学教育出版)、『パラグラフ・ライティング基礎演習』『ジャンル別パラグラフ・ライティング』(成美堂)、『ライティングで学ぶ英語プレゼンテーションの基礎』『英語で英語を教える授業ハンドブック』(南雲堂)などがある。

技能統合型ライティング活動 (Integrated writing activities)	
Writing for information (WI)	Writing for presentations (WP)
メモ書きのように自分の情報として内容が確認できるように行うライティング	発表原稿のように読み手を想定して内容と形式に留意して行うライティング
○外国語で聞いたり読んだりしたことを活用して、外国語で書いて情報や考えなどの <u>概要・意図</u> を伝え合うコミュニケーション力	○外国語で聞いたり読んだりしたことを活用して、外国語で書いて情報や考えなどの <u>概要・詳細・意図</u> を伝え合うコミュニケーション力
○知識や得た情報を活用して、 <u>自分の意見や考え</u> を外国語で整理する力	○知識や得た情報を活用して、 <u>自分の意見や考え</u> を外国語で形成・整理・再構築する力
〈活動例〉 ●スピーチを聞きながらメモを取り、内容について自分の意見や考えをまとめる ●ディベートやディスカッションなどにおけるポイントを記録し発言に備える	〈活動例〉 ●読んだ内容について自分の意見や考えを書き、スピーチを行う ●読んだ内容に要約を書き、発表を行う

う観点からは、WIは「外国語で書いて情報や考えなどの概要・意図を伝え合うコミュニケーション力、自分の意見や考えを整理する力」を育む授業づくりに適していると思われます。またWPは、概要・意図に加えて「詳細を伝え合うコミュニケーション力」や自分の意見や考えを整理してさらに「形成・再構築する力」を育む授業づくりに適していると思われます。

技能統合型ライティング活動の指導モデル

WI、WPという2つのライティング活動の分類に基づき、それぞれの活動例にあるような授業づくりはどのように行えばよいのか、高等学校の授業における指導モデルを提案したいと思います。まず、50分間の授業の基本ステップとして、図2のような指導手順(段階)が考えられます(杉田, 2011)。

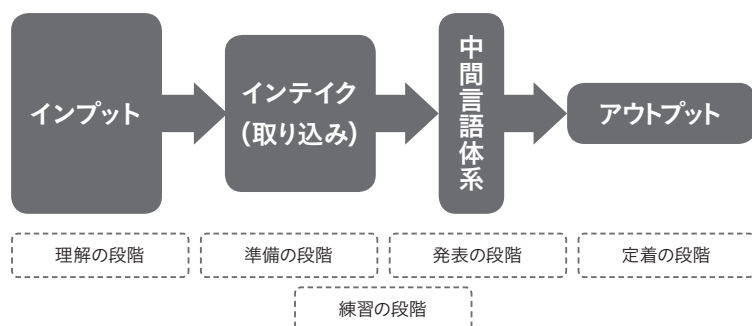
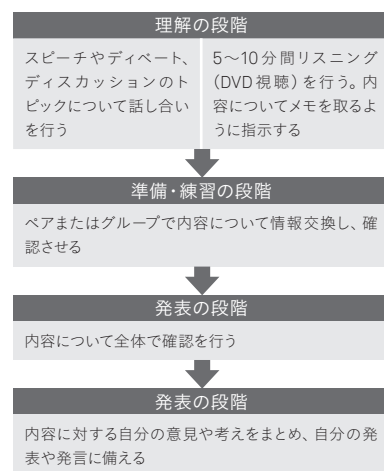
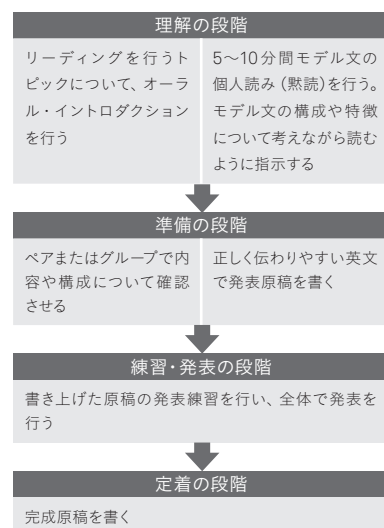


図2: 50分の授業における指導の基本ステップ(段階)

この基本ステップに基づいて、WIの指導をモデル化した一例を示します。



こちらはWPの指導をモデル化した一例です。



次号では、これらの指導モデルに沿って、ライティングによる発信力・自己表現力を高めるうえで、効果的な指導の工夫について考えていきたいと思います。

【参考文献】 Harmer, J. (2007). *The practice of English language teaching* (4th ed). Essex: Pearson.
 岡秀夫・赤池秀代・酒井志延 (2004). 『英語授業力強化マニュアル』大修館書店
 杉田由仁 (2011). 『4技能統合におけるライティング活動の指導手順』『第35回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会山梨大会研究紀要』(p.34)

表現力や発信力を 高める授業づくり

〔連載〕第2回

次期学習指導要領で、 中学校の英語教育に求められること

信州大学 学術研究院 教育学系 教授 酒井 英樹

前回、次期学習指導要領では、「英語を使って何ができるようになるのか」という観点から領域別の目標が示されていることについて紹介しました。今回は、この領域別の目標の中で求められている「即興的な言語使用」に焦点を当てます。

即興的な言語使用とは

次期学習指導要領では、次に示すように、領域別の目標において「即興で話すことができるように指導すること」が求められています。

話すこと [やり取り]

ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。

話すこと [発表]

ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。

即興で「伝え合うこと」や「話すこと」、すなわち「即興的な言語使用」とは、その場で考えたことを即座に話す

ことです（言語使用には書くことも含まれますが、今回は話すことに焦点を当てます）。私たちは話す際、①概念化の段階（内容を考える段階）、②言語化の段階（その内容をある言語で表現する段階）、③調音化の段階（実際に音声化する段階）という段階を経ます。即興的に話す力を伸ばすためには時間的制約の下で①から③を経験させることが重要です。

また、発話をplanned speech（準備のある発話）とunplanned speech（準備のない発話）に分けて考えることがあります。「準備のある発話」とは、話す内容や表現を思い描いてから話すことや、あらかじめ原稿を書いておいてから話すことです。「準備のない発話」とは、その場で即座に話すことを指します。

実際の発話は、両方の種類の発話を含んでいると考えられています。即興で「伝え合うこと」や「話すこと」を指導するからといって、常に準備のない発話を行わせるのは不自然です。言語活動のなかで、準備のある発話と準備のない発話のバランスを取るように工夫していきましょう。

即興的な言語使用の力を育む 2つの工夫

工夫①

あらかじめ原稿を書かせてから即興的なやり取りにつなげる指導

まず、あるトピックについて英作文をさせます。次に、生徒同士でペアを組ませ、互いの書いた内容を紹介し合っても

Hideki SAKAI

酒井 英樹 (さかい・ひでき)

信州大学学術研究院教育学系教授。専門は英語教育、第二言語習得。主な著書に『小学校外国語活動 基本の「き」』(大修館書店)、『はじめての英語教育研究』(共著、研究社)、『新しい英語教育の展開』(共著、玉川大学出版部)、『小中連携を意識した中学校英語の改善』(共著、三省堂)、中学校検定教科書『NEW Crown English Series 1・2・3』(共著、三省堂)がある。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語ワーキンググループ及び言語能力の向上に関する特別チームの委員を務めた。



らいます。その後、ペアを交替して、やり取りする活動を繰り返します。ペアを交替するごとに、次のように活動の条件を少しずつ変えていきます。

条件1

書いた英語を見ながら話してもよいと指示する。話し終わったら、適宜、質疑応答させる。

条件2

書いた英語を見てもよいが、話す際には相手の顔を見るように指示する(Read & Look Up)。

条件3

一文ごとに相手の顔を見て相手の理解を“OK?”や“Do you understand?”などと言って確認するように指示する。聞き手が理解していない場合には、繰り返させたり、説明を加えさせたりする。

条件4

条件3に加えて、聞き手に、質問をしたり、感想を述べたり、相づちを打ったりするように指示する。

これは、一方的に話すのではなく、相手に割り込ませる隙を見せようという指導なので、私は「隙見せ法」と呼んでいます。この活動では、書いた英語は同じですが、聞き手の反応によって話題が変わったり、あとで言おうとしていたことをすぐに言わなくてはならなくなったりします。つまり、「準備のある発話(書いた英語)」と「準備のない発話(聞き手の反応に応じた発話)」がバランスよく生じるのです。ま

た、準備のない発話は、聞き手の反応を見て発話する段階では、概念化、言語化、調音化の段階をその場で即座に行うことが求められます。

この活動のポイントは、ペアを交替してやり取りを繰り返すことです。最初のうちは、書いた英語を読み上げることので精いっぱいであった生徒が、次第にその場で英語表現を変えながら工夫して発話するようになります。

教師は、(1) 英作文をする時点の指導(例、添削)と(2) 相手の理解を確認する言い方(“OK?”や“Do you understand?” “Do you have any questions?”など)や、質問の仕方、相づちの表現、感想の言い方などの指導を行います。

工夫②

Do-Learn-Do Again

「即興的な言語使用」をする力の育成のためには、繰り返し経験することが重要です。一方で、使わせるばかりでは、知らない表現はいつまでたっても学ぶことはありませんし、疑問に思ったことはいつまでたっても解決することはありません。話すなかで、学習者は、どのように言えば良いのかと疑問を持ち、知りたいと思うようになります。その瞬間を上手に捉えて Learn の段階で指導することが重要です。そして、再び言語使用の機会を与えるのです。この手順を、私は Do-Learn-Do Again と呼んでいます。

My Dream のレッスンを例として挙げます。レッスンの開始時に、

“What’s your dream?” “Why?”と問い掛けて、ペアで夢についてやり取りをさせます。次に、テキストの内容を理解したり、「want + to 不定詞」の文構造を学んだり、理由の述べ方を学んだりします。そして、再び “What’s your dream?” “Why?”と投げ掛けて、別のペアでやり取りをさせます。整理すると次のようになります。

【Do】ペアでのやり取り

【Learn】教科書を使った学習

【Do Again】別のペアでのやり取り

この指導では、Doの段階で「即興的な言語使用」をさせることとなります。その際、「want + to 不定詞」が未習なので活動ができないだろうと思いつまず、生徒が持っている力で言語化をする経験をさせましょう。

この活動のポイントは、Do の段階で、生徒がすでに持っている力でどの程度までできるのか、という生徒の学習段階をよく見極めて、Learn の段階で指導を行うことです。Learn における活動としては、文構造の学習や文型練習、言えなかった表現を教科書や辞書を使って調べたり、教師などに質問して解決したりする学習など明示的な指導方法があります。また、教師が ALT とのやり取りを見せたり、生徒の夢を紹介するなかで、その生徒が言えなかった表現を示したり、教師が生徒とやり取りをしてそのなかでリキャストしたりするなど、さりげなく指導する方法も良いでしょう。

外国語教科化における 文字指導のあり方

〔連載〕第2回

読み書きへの関心を高めるための 文字の扱い方

愛知県立大学 外国語学部 准教授 池田 周

次期学習指導要領の小学校「外国語科」では、文字について「読み方を適切に発音」し、「活字体で文字を書く」、「音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現を書き写す」ことができるようになる
ところまでをめざします。今回は、文字そのものの指導、および児童の読み書きへの関心を高め
ながら、文字を他の知識・技能の指導にどのように取り入れることができるのかについて考えて
みたいと思います。

文字と出合わせ、読み書きへと導く

①文字に慣れ親しませるにも、まず音声から。「文字を見ながら」読み方を聞く

文字の指導は、中学年から児童に身近な「ABC Song」などを使い、形を見ながらその読み方（名前）の発音を十分に「聞くこと」から始めます。日本語読みとの違い（「シー」と /si:/ など）に気付かせ、さらに文字カードを半分隠したり、少しずつ見せたりして形を識別する力を高めます。「Aa」「Bb」のように、大文字と小文字を併記して親しませてもよいでしょう。

高学年では、文字の順番を変えたり、大文字と小文字をランダムに提示したりして、児童にその名前を発音させ

ながら定着を促します。小学校では、正確な発音ができるようにする以上に、十分な音声インプットに触れることを大切にしましょう。

②身の回りのアルファベットの文字に気付かせ、語の読み書きへの興味・関心を高める

身近な掲示物やパンフレットなどからアルファベットの文字を探させる活動は、児童の文字に対する興味を高めます。このとき、目にした「文字のまとまり（語）」が、児童にとって「意味のあるもの」であれば、自分で読んだり書いたりしたいと思うようになります。日本語とは違い、英語には文字の「名前」とは異なる「音」があるため、「C（シー）、A

（エイ）、T（ティー）」のように順番に文字の名前を言っても、その語（＝CAT）を正しく発音したことにはなりません。そこで初めは、文字の名前を続ければ意味が伝わるアルファベット略語（CD、PC、TVなど）を読んでもみるとよいでしょう。次に外来語として身近で、日常で何となく目にするつづりから意味と発音が思い浮かぶ語（OPEN、STOP、BOOKなど）を取り入れてみましょう。

③文字の形をイメージとして表す活動から、4本の罫線上に活字体で正確に書く活動へ

実際に文字を紙に書く前に、体を使って表す、宙に指で書く、友達の背中に書くなどの活動をするのも有効です。その

Chika IKEDA

池田 周 (いけだ・ちか)

愛知県立大学外国語学部准教授。英国ウォーリック大学博士課程修了。博士（英語教育・応用言語学）。小学校英語教育学会愛知支部理事、「愛知県義務教育問題研究協議会専門部会」委員、文部科学省「小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会」委員などを務める。外国語としての英語リテラシー習得について、小・中・高等学校を通じた指導のあり方、および国語科と外国語科の連携に関心をもつ。



とき、相手に何の文字かを当ててもらうと、正確に伝わるように表わすことを意識し始めます。相手から見てCは左右どちらが開いているかなどを、はっきり分かりやすく伝えようとします。bとd、pとq、Pとpなどの形の対比も活動を盛り上げます。文字が伝わる、理解できる喜びが、書き言葉によるコミュニケーションへの意欲につながるのです。

4線に書くときには、線をなぞったりしながら、位置や高さを正しく書くことに留意させましょう。つながるべき部分が離れていたり、形は正しくても色の付いた3線目とは異なる線がベースとなっていたりすることがあります。色線を基準として、正確に書けるようになったら、文字の幅がそろって読みやすい、ということも意識させてみましょう。

文字をほかの知識・技能の指導に生かす

①語の区切りや語順への気づきを促す

語と語の間にスペースを空けるのは日本語と異なる英語の特徴であるため、習得が困難な児童もいます。例えば「主語＋動詞＋目的語」の文構造を、I like dogs. / I like cats. のように、黒板に語カードで示し、dogsとcatsのカードを入れ替えて発音しながら、児童に意味の変化を理解させてみましょう。文中の同じ位置にある「文字のまとまり」が置き換わって意味が変わる様子を見ることにより、語の区切りや目的語の位置への気づきが促されます。注目させる品詞の語カー

ドの色を変えれば、より視覚的に分かりやすくなります。

また、絵本の読み聞かせも効果的です。その場合、単に読みに合わせて文をなぞるだけではなく、英語特有のリズムや語連結などに合わせて指先を動かし、内容理解に大切な内容語を囲んで、その区切りや位置を意識させましょう。

②細かな発音の違いを意識させる

高学年の「外国語科」では、「読むこと」の領域の目標として、活字体の「読み方を発音することができるようにする」ことが含まれています。この「読み方」は文字の「名前」のことですが、同時に、文字のまとまり（語）を見て発音を推測する手掛かりとなるよう文字の「音」を扱うこともできます。これが、内容の取扱いにおいて配慮すべき「音声と文字とを関連付けて指導する」ことにつながります。全ての文字と音の対応を習得させることをめざすのではなく、言語活動のなかで必要に応じて文字の音に気付かせましょう。

例えば、音声のみを頼りに表現を習得する場合、弱い音や曖昧で聞こえづらい音は落とされがちです。児童に「I'd like ~. / I like ~.」「I can ~. / I can't」「Yes, I can. / No, I can't.」などの発音を区別させるには、/d/ や /t/ の「音」の存在を意識させることが必要です。「I'd like ~.」の導入に際し、既出の「I like ~.」と並べて板書し、指でdの文字を囲みながら「/d/, /d/, /d/, ...」と言います。そしてつづりを添えた絵カードを使って、dから始まる語（dog, desk,

dinosaur など）を発音させ、初めの音とその文字が全て同じであることに気付かせます。そしてもう一度 I'd like ~. のdに注目し、「/d/, /d/, ... I'd, I'd like」と発音させます。児童がdの音を落として発音したら、dの文字カードを手掛かりとして示したり、文字を指さして「/d/, /d/, ...」と言いながら注意を促したりすることもできます。

さらに「外国語科」では、動名詞や過去形の「活用頻度の高い基本的なもの」を含む文に「意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れる」ことになっています。I play tennis. / I like playing tennis. / I watch tennis. / I like watching tennis. などの文を十分に聞き比べて発音し、意味の違いを感じたあとで文字でも見比べ、likeに続くplayとwatchが共通する響き（-ing）を伴うことを視覚的に理解します。ほかにも「I'm good at playing tennis.」などで、-ingの部分の存在を音声だけでなく文字でも確認していくことにより、語形変化について児童の意識が少しずつ芽生えていくことも期待できます。

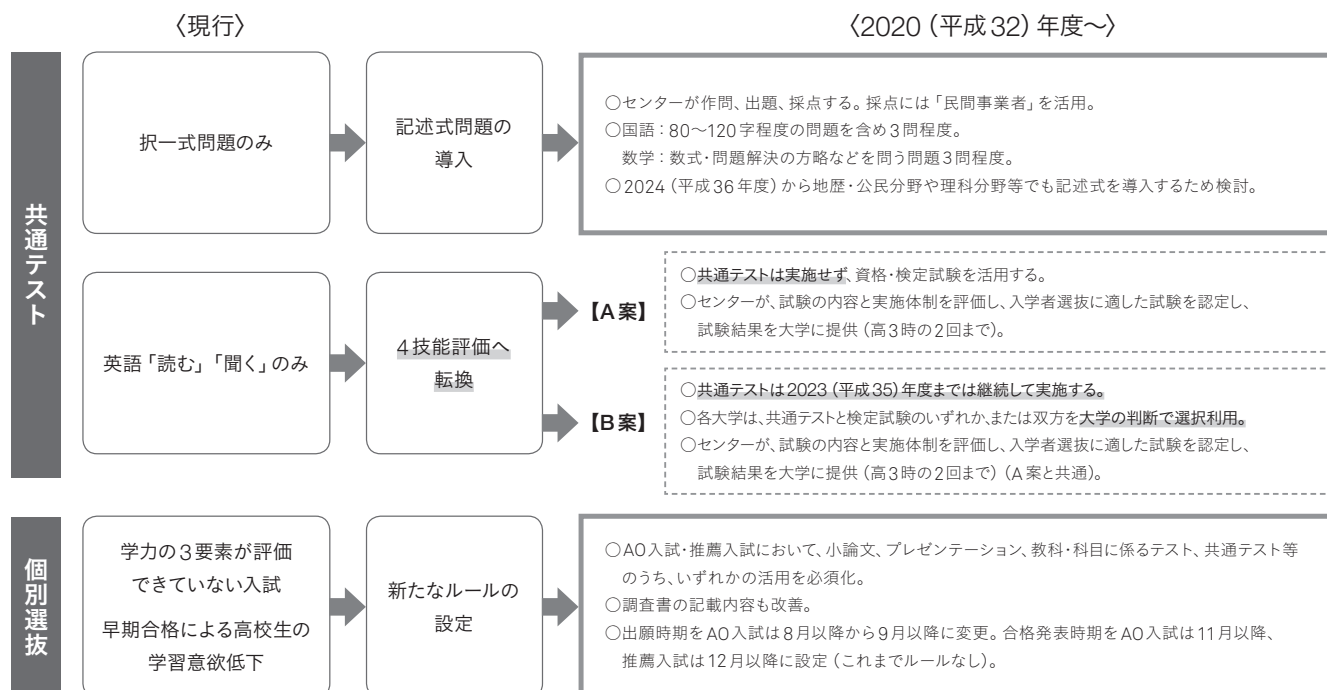
児童が文字に慣れ親しんでくれば、このように目的を持って、文字を授業に組み込むことができます。その場合、小学校では文字でルールを整理して解説するのではなく、音声で慣れ親しんだ語句や表現を、文字を介してあらためて繰り返すことにより、それらの定着や日本語とは異なる英語の特徴への気づきを促すことに留意しておきましょう。

文部科学省が 「大学入学共通テスト(仮称)」の 実施方針(案)を発表

文部科学省は2016年3月の高大接続システム改革会議「最終報告」を踏まえ、2017年5月16日、「高大接続改革の進捗状況」について公表した。2020年度から大学入試センター試験(センター試験)に代わって実施される予定の「大学入学共通テスト(仮称)」(共通テスト)では、英語試験で民間の資格・検定試験を活用し、全都道府県で1年に複数回実施することを検討している。

高大接続改革(大学入学者選抜改革)

- ◆ 受験生の「学力の3要素」について、多面的・総合的に評価する入試に転換
 - ① 知識・技能 ② 思考力・判断力・表現力 ③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度
- ◆ 高大接続改革実行プラン、高大接続システム改革会議最終報告に沿って、大学入学者選抜の改革を着実に推進
- ◆ 2020(平成32)年度「大学入学共通テスト(仮称)」開始 ※記述式、英語4技能
 - 2024(平成36)年度新学習指導要領を前提に更に改革



4技能の適切な評価が求められた

共通テストは、学習指導要領で示される「学力の3要素」に基づき、多面的・総合的に評価をする入試へと転換する。「学力の3要素」とは、①知識・技能、②

知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を示す。

これまでのセンター試験の英語試験

では「読む」「聞く」の2技能を中心に選択式で問う出題であった。また、センター試験は50万人規模で試験を一斉実施するため、「話す」「書く」については環境整備の観点から実施が困難とされ

ていた。しかし、グローバル化が急速に進展するなか、英語によるコミュニケーション能力の向上が課題となり、現行の高等学校学習指導要領では、「授業は英語で行うことを基本」とし、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能を総合的に育成することが求められている。また、次期学習指導要領では、小・中・高等学校で一環した目標を実現するため、外国語の能力を総合的に評価するCEFR（ヨーロッパ共通言語参照枠）等を参考に、段階的な「国の指標形式の目標」を設定するとともに、統合的な言語活動を

一層重視することとしている。このような英語教育改革の方向性に照らし合わせ、大学入学者選抜においても、4技能を適切に評価することが求められた。

英検など民間の資格・検定試験を活用

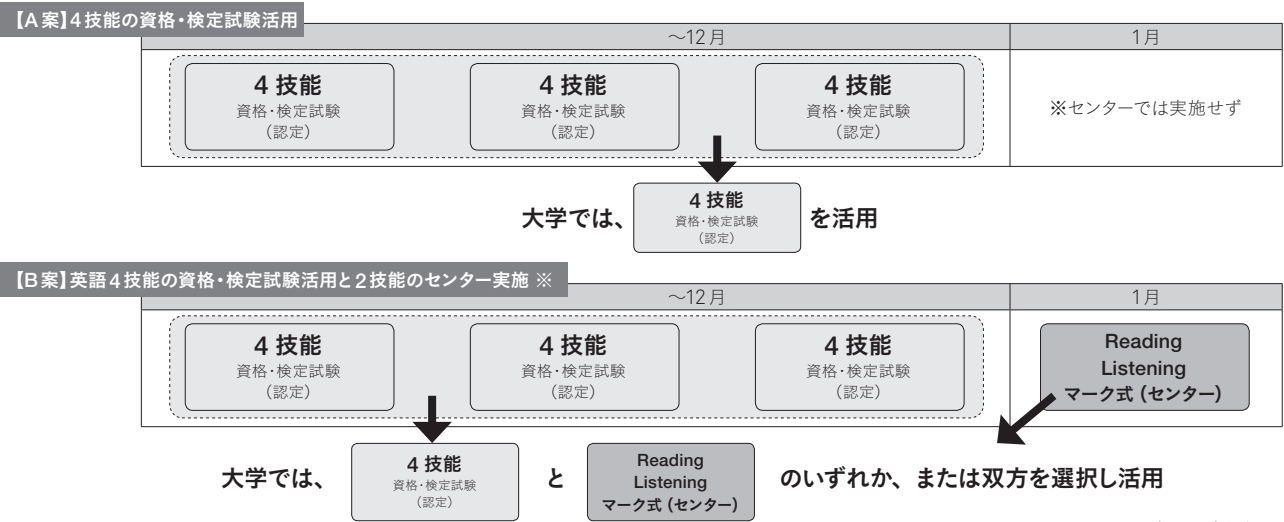
共通テストではすでに民間事業者等によって広く実施され、一定の評価が定着している、実用英語技能検定（英検）やTEAP、IELTSなど4技能型の資格・検定試験のうち、試験内容・実施体制等が入学者選抜に活用するうえで必要な水準および要件を満たしているもの

をセンターが「認定試験」として活用する。大学入試センターは、受検者の負担や高等学校教育への影響等を考慮し、高校3年生の4月から12月の2回までの試験結果とCEFRの段階別成績表示を各大学へ送付する。

英語4技能評価は2案から決定

共通テストにおける英語試験の取り扱いについては、下図の2案について、大学・高等学校等の関係団体等の意見を聞きながら検討し、実施方針策定時までに結論を得るとされた。

●英語4技能評価について



※2技能のセンター実施は、2023（平成35）年度まで

なぜ、資格・検定試験を活用するのか

民間の資格・検定試験は、4技能を総合的に評価するものとして社会的に認知され、一定の評価が定着している。高等学校教育や大学の初年次教育の場でも活用が進み、推薦・AO入試を中心に大学入学者選抜にも活用されている。

文部科学省の調べでは「大学生の高校生時の英語資格・検定試験の受検状況」は、約37%（約23万人：推計）であり、「大学入学者選抜において英語資格・検定試験を活用している大学（2015年度）」（右表）は、国立大学では、推薦入試17.1%、AO入試14.6%、一般入試7.3%で、私立大学では、推薦入試30.7%、AO入試21.2%、一般入試6.4%だった。

●大学入学者選抜における民間の英語資格・検定試験の活用状況

	純計	推薦	AO	一般
国立	23 (28.0%)	14 (17.1%)	12 (14.6%)	6 (7.3%)
公立	19 (22.6%)	14 (16.7%)	9 (10.7%)	1 (1.2%)
私立	229 (39.5%)	178 (30.7%)	123 (21.2%)	37 (6.4%)
計	271 (36.3%)	206 (27.6%)	144 (19.3%)	44 (5.9%)

上段（単位／校）、下段の（ ）は国立82校、公立84校、私立580校、計746校に対する割合

このような状況を踏まえ、大学入学者選抜において、民間の資格・検定試験を積極的に活用することによって、「話す」

「書く」を含む4技能の評価を推進し、高等学校までの段階における授業の改善を促進することが期待されている。

※図版はいずれも、文部科学省「高大接続改革の進捗状況について」（平成29年5月16日）より抜粋

第7回 TEAP 連絡協議会レポート

2017年度入試において TEAPはどのように活用されたのか

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は、大学入試の改革を進めてきた各大学の取り組みを広く共有するため、TEAP 連絡協議会を開催している。第7回を迎えた今回は、東京と大阪の2会場で開催され、「4技能入試最前線～2017年度入試はどうだったのか」と題し、入試結果の総括と2018年度以降の展望について、各大学担当者が発表した。4月21日の東京会場（明治大学駿河台キャンパス）での様子をレポートする。

大学での英語外部検定試験 活用状況を各大学が発表

TEAP 連絡協議会は、加盟56大学におけるTEAPおよびTEAP CBTを利用した新たな入学試験の開発・実施を目的とした情報交換、高大接続を見据えた「中等・高等教育における人材育成教育（英語教育）」の改革を推進するための情報発信などを行っている。2017年度入試では、TEAPなどの英語外部検定試験を利用した入試を実施する大学が増加し、今回のTEAP 連絡協議会では、上智大学、関西大学、早稲田大学、明治大学の関係者による入試での利用状況と今後の展望に加え、英語力の測定と進



路指導の観点から東京都立新宿高等学校でのTEAP活用事例が紹介された。会場には大学の英語教育や入試担当者をはじめ、高等学校の英語科教員や進

路指導担当者などが集まった。今回は定員200名超えの満席となるほどの盛会となり、大学入試における英語外部検定試験への関心の高まりがうかがえた。

01 2016年度 TEAP 公開試験実施報告

英検協会 教育事業部部長 塩崎 修健

塩崎 部長によれば、2016年度はTEAPを年3回、全国12会場で実施し、3回の合計志願者数は1万3,850名となり、前年度から5.5%の増加が見られた。なかでも、技能別の志願者数を見ると、2技能受験者は前年度の40%に減少し、4技能受験者が、前年度の5,308名から今年度は1万600名へと倍増している。大学入試や大学での英語教育において、4技能が重視されていることの表れだと言えるだろう。

また、2017年度の実施にあたっては、第2回（10月1日）、第3回（12月3日）の

TEAP 団体受験校を募集しており、2016年度のTEAP 団体受験実績として、東京都指定の英語教育推進校や私立高等学校での事例を紹介した。そして、2016年度よりスタートしたTEAP CBTについて、スピーキングテストが対面式から録音式に変更となったことを告知した。

さらに、今後の大学入試におけるTEAP 利用状況として、2018年度入試では九州大学共創学部、立教大学など、2019年度入試では、広島大学が英語外部検定試験のセンター試験「英語」での活用を発表していると紹介した。



02 2017年度TEAP利用型入試概況

上智大学 入学センター長・理工学部情報理工学科 教授 伊呂原 隆 氏



まず登壇したのは、上智大学の伊呂原隆氏だ。同大学では2015年度入試から、全学科でTEAP利用型入試を導入した。2015年度入試では、TEAPの2技能の総合点基準をクリアすることで出願可能とし、入試当日には英語の試験は行わず、学科が指定する選択科目のみを受験。文章理解力や論理的思考力など、より総合的な学力到達度を測る試験内容となっている。2016年度入試では、学科によって2技能か4技能を指

定し、それぞれの技能別基準も付された。そして、2017年度入試から、全学科4技能受験となったことを説明し、学科別の出願基準スコアを示した。そして、実際に出题された、世界史や数学の試験問題を紹介した。

伊呂原氏によれば、2016年度入試は2技能で、2017年度入試から4技能受験を課した学科では、語学系学科を除き、多くの学科で志願者数が減少したものの、2016年度入試から4技能を課している学科は、2017年度入試で志願者数が増加したという。また、TEAP利用型入試（4技能）で入学した学生の英語力が高いことや、入学後は4技能に優れ、グローバルに活躍する学生を育成していることを強調し、「今後も4技能入

試を継続して、高大接続に貢献していきたい」との意向を表した。



関西大学一般入試での英語外部試験の活用について 03

関西大学 学長補佐・文学部 教授 堀 潤之 氏

堀潤之氏によれば、関西大学は1922（大正11）年から、教育理念の「学の実化」のなかで、「国際的精神の涵養」や「外国語学習の必要」を説いており、現

在、その理念を実現すべく、自ら考え、自律的かつ積極的に行動できる「考動力」にあふれる人材の育成をめざしているという。2017年度入試で文学部と外国語学部の一般入試に「英語外部試験利用方式」を導入した背景には、大学入試や高等学校での英語教育に関する国の方針、大阪府の「使える英語プロジェクト事業」といった「外部環境」と、国際化戦略を推進する大学として、文学部や外国語学部では外国語の高度な運用能力を身に付け、国際社会や文化のあり方、国際的な諸問題などについて理解を深めようとする者を求めることをアドミッションポリシーで示しているという「内部環境」があると説明した。

そして文学部の2017年度入試での、英語外部試験利用方式受験者が併願したほかの試験での英語の得点状況を例示した。英語外部試験を利用しなかった受験者の方が最高得点は高いが、全体的に見ると利用した受験者の平均点は高く、得点の低い受験生もいなかったという。さらに、2018年度入試での展開にも触れ、経済学部と政策創造学部で、文学部と同様に2教科型の英語外部試験利用方式を実施する予定だと紹介した。



04 4技能型入試 —導入してみて分かること (文化構想学部・文学部の場合)

早稲田大学 文学学術院 教授 安藤 文人 氏

早稲田大学では文化構想学部と文学部で、2017年度より一般入試に「英語4技能テスト利用型」を導入した。安藤氏は「4技能型入試—導入してみて分かること」と題して発表した。まず4技能テ

スト利用型の募集人員を、文化構想学部70名(入学定員の8.1%)、文学部50名(同7.5%)としたのは、入学した学生の存在が教室内で明確になるようにするためだという。選考方法としては、TEAPなどの4技能テストで、基準点となる総合点(TEAPの場合280点)と各技能点(同65点)を上回っている者について、学部一般入試の国語と地歴の2教科の合計得点によって判定する。

結果として、文化構想学部、文学部いずれも予想をはるかに上回る志願者数に達し、募集人員あたりの志願倍率は文化構想学部7.8倍、文学部7.4倍だった。また、「4技能テスト利用型の導入による学部全体の志願者数減少には至らなかったことも予想外だった」と安藤氏は述べ、「4技能テスト利用型」の志願者のう

ち、およそ8割が一般入試(3教科型)との学部内併願をしたという。TEAP利用者も実用英語技能検定(英検)に次いでかなりの人数を占めており、受験生の間で4技能を測る試験としてTEAPが広まっていることを強調した。さらに、入試結果からは、併願による合格も含め、4技能型入試の志願者は、合格率が極めて高く、一般入試(3教科型)と併願し、一般入試でも合格した志願者がかなりの数に上ったことを紹介。そのような志願者は一般入試の英語試験でも高い得点を収め、国語や地歴科目でも高い得点を取っていることが分かった。この結果について、安藤氏は「すでに英語の基準点を満たすことによって、国語や地歴科目などへの十分な準備のもとで入試に臨むことができたのではないかと推測を述べた。



外部検定試験活用の展望と明治大学入試の未来 05

明治大学 国際日本学部 教授 尾関 直子 氏

尾関氏はまず、大学入試の主な種類と、外部検定試験を入試に活用する場合の形態について分類した。大学入試には、複数の学部に出願して、1つの試験で可否が決まる「全学入試」、学部ごとに実施する「一般入試」のほか、「センター利用入試」や「推薦入試」などがある。外部検定試験を入試に活用するにあたっては、一般入試と同枠で実施するのか、別枠で実施するのかを分けて考える必要があるとした。そして、同枠では「みなし割合」「みなし満点」があり、「みなし割合」は「通常方式との併願可」「通常方式との併願否」に区分でき、別枠では「通常方式との併願可」「通常方式との併願否」に区分できると説き、それぞれの形態を採用している大学を例示した。

続いて、明治大学における外部検定

試験の導入状況と今後の展望を紹介。2017年度入試は経営学部が「別枠」の「通常方式との併願否」で実施し、2018年度入試では、商学部では「別枠」で、国際日本学部では「同枠」での導入が決まっているという。2019年度入試に向けて、学内では現在、全学統一試験での導入を検討中であり、2020年度以降には他学部でも一般入試に導入されることを希望していると述べた。尾関氏が在籍する国際日本学部では、CEFRのB2に達する英語力があれば、大学での教育を通じて十分に英語力を伸ばしていくことができると捉え、TEAPの場合、総合334点以上を基準としていることをはじめ、ほかの試験のスコアなども紹介した。

最後に、「国が学習指導要領で求めている高等学校での英語教育との整合性

があること」「試験としての妥当性や信頼性が高いこと」「グローバル人材育成の観点」から、4技能試験を重視していることを強調した。



英語力測定と進路指導の観点から ～高校現場での活用

東京都立新宿高等学校 副校長 中川 徹 氏

06



創立95周年を迎える東京都立新宿高等学校は、2003年度より、東京都の進学重視型単位制高校、2007年度には進学指導特別推進校に指定され、学力を最大限に伸ばし、生涯学び続ける力の育成、次代を担うたくましいリーダーの育成などに取り組んでいる。

同校では2年生で学習到達度テストを実施していたが、大学入試での外部検定試験の導入を見据えて、2015年度より外部検定試験を実施してきた。2016

年度には、東京都の英語教育推進校の指定校として、外部検定試験の検定料補助を受け、4技能を測り、大学入試でも活用できる外部検定試験としてTEAPを3年生で団体受験し、英語力判定調査に活用した。TEAPを選択するにあたっては、同校の生徒が受験する大学の状況を見据えて最適と判断したという。そして、TEAPの受験に向けて、日頃の授業でペアワークやグループワークによるコミュニケーション活動や、自分の考えを英語で書く活動を増やしている。

最後に、「生徒にとっては、TEAPとセンター試験の両方を受験することへの学習の負担が懸念される」「試験日程が高校3年生の大学受験スケジュールと必ずしもそぐわない」「センター入試

利用大学と比べると、まだ採用大学が限られること」「英語が得意な生徒がメリットを感じる活用を大学に考えてほしい」といった、高校現場が感じている課題と要望を会場に投げ掛けた。

07 4技能入試への関心の高さがうかがえた
パネルディスカッション

協議会では、各大学や高等学校関係者からの発表をもとに、「4技能入試が与えるインパクト～現場では何が起きているのか～課題と展望」と題し、パネルディスカッションも行った。議論は、「4技能入試がなぜ求められ、広がりを見せているのか」という話題から、「センター入試はどう変わるのか」「今後の大学入試で個別試験の向かうべき方向」「高校現場

では実際に、生徒や保護者、教員は4技能入試や大学入試改革について、どのような反応を見せているのか」といった話題にまで及んだ。そして、パネリストの発言に共通するのは「4技能入試は大学から受験生へのメッセージが込められている」「今後さらに4技能入試は拡大し、遠からぬ将来、個別入試も4技能入試に置き換わっていくのではないかと」、4

技能入試への期待だった。また、参加者からも質問が続々と寄せられ、4技能入試への関心の高さがうかがえた。



なぜ TEAP を選び、 どのような英語力が身に付いたのか

現在、全国で70以上の大学が入学試験にTEAPを採用し、ますます広がりを見せている。

数ある大学入試制度のなかから、「英語資格試験利用」を選択した4名の学生が、TEAPを選んだ理由や、TEAP受験を通して身に付けた英語力が、大学での授業でどのように生かされているかなどについて語り合った。



伊藤 康紀さん
上智大学 2年生
経済学部
経営学科



東 玲さん
東京理科大学 2年生
経営学部
ビジネスエコノミクス学科



相内 香穂さん
立教大学 2年生
文学部
文学科 日本文学専修



藤田 ジュリアンさん
青山学院大学 2年生
文学部
英米文学科

英語が得意な人にも苦手な人にも TEAP 利用入試は選択されている

皆さんはなぜ、TEAP 利用入試を選択したのでしょうか。

藤田 僕は高校卒業後、オーストラリアなどに語学留学をしていて、「もう一度、日本で英語を学び直したい」と思って帰国しました。第一志望の青山学院大学英米文学科に TEAP 利用型入試があったのですが、最初から入試で TEAP を利用しようと思っていたのではなく、「1 つでも英語資格を多く受けておいた方が有利かな」という気持ちで TEAP を受験しました。結果として TEAP の利用を選択した、という形ですね。

東 私も、最初から TEAP 利用を意識してはいませんでした。実は、軽い気持ちで「TEAP を受けてみよう」と受験したのですが、思っていたより点数が良かったので、「それなら TEAP 利用入試を選ぼうかな」という感じでした。それに、私は緊張するタイプで…。今もとても緊張しているのですよ。だから1時間という受験時間のなかでは、緊張して実力を出し切れないということが悩みだったのです。でも、TEAP は長い時間をかけて評価してもらえるので、実力を出しやすいかなと思いました。

相内 私は立教大学文学部文学科が第一志望でしたが、ちょうど私が受験する年から TEAP 利用入試が導入されて、

予備校の先生から勧められました。立教では、TEAP で基準点を取っていれば、英語以外の2教科で可否判定されるシステム。私は試験科目のなかで日本史が苦手だったので「TEAP 利用入試を選んで、入試当日の英語受験が免除されると、少しは楽な気持ちになれるかもしれない」と思い、選びました。TEAP 利用入試があって本当に良かったです！実際に試験の直前は、英語の試験がない分、日本史の勉強に時間をかけられたので、本番は安心して試験に挑むことができました。

伊藤 僕は高校の先生に「まずは受けてみたら」と TEAP を勧められました。国立大学も受験したので、1教科でも受験科目を減らしたかったこともあり、TEAP 利用入試を選びました。そして、1教科減った時間を他教科の勉強にあてることができました。

4 技能のどこに弱点があるかを知り 克服すると英語力が一気に上がる

TEAP 受験のために、どのような勉強をしましたか？

伊藤 高校の英語の授業だけです。あとは、DVD で洋画を観ることをしていました。1日3本の映画を2回ずつぐらい観続けていると、2、3週間ではほぼ字幕なしで理解できるようになりました。また、高校1年生の夏休みに学校のプログラム

でカナダに短期留学をして、そこで英語が使えるようになりましたね。映画での学習や短期留学で経験したことを TEAP 受験前に思い出せば「いけるんじゃないか!」と思って。そうしたら、結構良い点数が出ました。

藤田 僕は TEAP 対策をする時間がなくて…。実は、TEAP を受験しようと思ったのが、受験日の1カ月前ぐらいだったのです。でも、短い時間でしたが、見本問題や出題形式を調べることはしました。直前に受けていた英検に似ている問題もあったので、あまり不安を感じることなく試験に臨みましたね。東さんはどのような勉強をしていたのですか？

東 私は音読が好きなので、普段から音読をしていました。また、外資系企業に勤めている母に、伝わりやすい英文の作り方を教えてもらっていました。一人で受験勉強をしていると堅苦しい表現や、古い言い回しを使いがちになるので、「I'm happy」程度の、伝わりやすい英語を書く練習をしました。

伊藤 TEAP 受験ではそういう伝わりやすい表現が大事ですね。相内さん



将来は、母と同じように外資系企業で活躍したい。社会人になってからでもいいので、いつかはアメリカへ留学したいです。

北欧に1年くらい留学したいです。2020年の東京オリンピック・パラリンピックではサポートスタッフとして参加し、人の役に立ちたいです。

TEAPの対策でスピーキングに自信が付きました。メイクアップに興味があるので、将来は語学力も生かしながら化粧品関係の仕事に就きたいです。

得意な英語を使って仕事がしたいので、中学・高校の英語教師をめざしています。大学の協定校であるイギリスの大学へ留学を計画し、IELTSを受験するなど準備中です。



はどのような対策をしていたのですか？

相内 私は高校3年生の夏と冬の2回、TEAPを受けましたが、1回目は独学だったため点数が伸びず、特に「スピーキングがダメだ」と、自信を失いかけてました。そこで、英語が得意な友達や英語の先生に面接官役をお願いして、アドバイスをもらいながらスピーキングの練習に時間を割きました。結果、2回目で点数が上がったときはうれしかったです。1回目の受験で知った自分の弱点は、一番点数を伸ばすことができるところですから、2回目の受験では弱点を克服することを中心に対策をして点数を伸ばし、合格点をクリアしました。

TEAPの実用的な英語は 大学の英語授業にも通じる

TEAPの試験内容やTEAP受験のための勉強は、大学の英語の授業でも役立っていますか？

相内 TEAPで出題される英文はセンター試験の長文よりも少し難しく感じましたが、実際に大学で学んでみて、TEAP

は大学での学習につながる内容だったと実感しています。

東 私も大学の授業で役立っています。
藤田 TEAPは大学で学ぼうとする人が受験するテストだと感じました。

伊藤 センター試験対策には過去問を解いていましたが、TEAPの問題を見て、普段から英字新聞を読んだり、英語ニュースを聞いたりすることが一番の対策になると感じました。そう考えるとTEAPの出題は実用的な英語だと思います。

藤田 確かに、僕もそう思います。

伊藤 大学入学後、高校の英語の授業とは違って、例えば英字新聞の経済面のグラフが授業の資料になることがありました。TEAPのリーディングテストのグラフを読む出題は、授業で役に立っていますね。

東 私は、TEAP対策で学んだ“伝わりやすい英語表現”が、授業で役立っています。

相内 TEAPのスピーキングテストは、社会的な内容の問題が多く出題されます。最初は戸惑いましたが、そのためのトレーニングをして試験に臨みました。大学入学後は1年次に英語でディスカッションする授業がありましたが、そのときのトレーニングが役立ちました。

藤田 僕もそう思います。大学の授業でのディスカッションでは、TEAPのスピーキングとリスニングが特に役立っています。

大学在学中に留学して さらに英語力を伸ばしたい

英語力をさらに伸ばすために、大学在学中に留学を考えていますか？

伊藤 僕は北欧に1年くらい留学したいと思っています。

東 私は、アメリカに留学したいですね。フロリダの大学に行きたいです。半年から1年は行けたらいいですね。

相内 そうですね、チャンスがあれば、行ってみたいです。

藤田 僕は来年の夏からイギリスのセント大学に留学する計画を進めています。大学の協定校への留学だと、留学先の学費がかからないので、ぜひ行きたいです。すでに、IELTSを受験する準備も始めています。

高校在学中から意欲的に学習してきた皆さんが、大学でもさらに英語力を伸ばし、国際舞台で活躍されることを期待しています。これからもがんばってください。



「広島大学進学ガイダンス&安河内哲也先生による英語勉強法特別講義」を開催

2019年度入試より、広島大学では、英検、TEAP、IELTSなどの英語外部検定試験を活用した入試の利用が、全ての募集へと拡大する。5月6日、広島大学・東千田未来創成センターにて、高校生や保護者、高校教職員を対象とした「広島大学進学ガイダンス」が開催され、新入試の最新情報とともに、本誌でも連載企画を持つ英語講師・安河内哲也先生が、「英語勉強法特別講義」を行った。



2019年度入試から一般入試で英語外部検定試験を活用

広島大学では『スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）』タイプA（トップ型）の採択を受け、グローバル人材の育成を推進しており、2016年度入試より、AO入試（総合評価方式）での英語外部検定試験の活用を開始した。そして今年2月には、「2019年度入試より、4技能を測る英語外部検定試験を一般入試でも活用する」という方針を公表した。

開会にあたり、広島大学入学センター長の杉原敏彦氏は「高校生のうちから英語コミュニケーション能力の育成に関心を持ち、自ら主体的に学んでいる人たちが本学に入学することは、グローバル人材育成に取り組む本学として大変意

義のあることだと考えています。皆さんには、今日のお話が英語コミュニケーション能力を高め、広島大学にぜひ入学したいという気持ちを改めて強くするきっかけになれば、これほどうれしいことはありません」と挨拶した。

そして、広島大学の英語外部検定試験の活用について、その趣旨と詳細を次のように説明した。

広島大学が一般入試に4技能を測る英語外部検定試験を活用すると決定した背景には、英語コミュニケーション能力が高く、レベルの高い大学教育を受けることを希望する者が入学することによって、大学のグローバル化の取り組みが活発になり、グローバル人材の育成をさらに推進していくことへの期待があると言う。そこで、一般入試で活用する英語外部検定試験は、2017年度入試のAO入試で指定している英語外部検定試験と同様とし、いずれの試験においても英語力の基準を、CEFRのB2以上にあたるスコア・等級と定めた（下表参照）。



実用英語技能検定（英検）	準1級以上
TEAP	334点以上
IELTS™（Academic Module）	5.5以上
※その他の検定試験については、広島大学のホームページを参照 https://www.hiroshima-u.ac.jp/news/38253	

英語外部検定試験の活用にあたっては、大学入試センター試験（センター試験）を利用する「一般入試前期日程および後期日程」と「AO入試（総合評価方式）Ⅱ型」および「推薦入試」の全ての募集において、2019年度入試からは、英語4技能を測る英語外部検定試験の結果を利用する。広島大学が定める次の条件を満たしている場合には、センター試験の「外国語（英語）」を満点とみなす。

条件1

センター試験の外国語のうち、英語（【筆記】及び【リスニング】）を受験していること（聴覚障害者でリスニング免除者は【筆記】のみ受験で可）。

条件2

各入試の出願期間最終日までに、「活用する英語外部検定試験」の当該スコア・等級を証明する書類の原本を提出すること。

そして、高校生が現役で受験をする場合、高校入学段階から主体的に学んできた姿勢を評価するため、スコアの有効期間は、2019年度入試の場合、2016年4月以降に受験した試験を有効としていることを添えて、発表を終えた。



リスニングとリーディングを 統合した学習を体験

プログラムは、安河内先生による特別講義へと移る。まず、公益財団法人日本英語検定協会制作部の本間充部長による、英検準1級とTEAPのリスニング・リーディングの形式の解説に続き、安河内先生はリスニング・リーディングを統合した学習法を伝授した。

本間部長は、英検は社会生活一般からビジネスやアカデミックまでを含む実用的な英語力を測り、TEAPは大学での学びに必要なアカデミックな英語力を測る試験であることを解説。それぞれの試験の試験時間や問題数を示したうえで、TEAPの公開見本問題をスクリーンに映し出し、リーディングのPART2では、グラフの情報を読み取る問題や大学内の掲示物から重要情報を読み取る問題などを例示して、TEAPの出題内容が英検とはどのように違うのかを紹介した。

安河内先生は、「日頃から4技能を統合してしっかり学んでおけば、英検準1級やTEAPの334点には到達できる力が付く。読解問題は音声付きの教材で学んだ方がよい」などと述べたうえで、「リスニングとリーディングは同時に学びましょう」と、参加者にペアを組ませて席を立た

せ、英検の読解問題にチャレンジさせた。英検5級から1級までの問題から1題ずつ例示し、ペアで話し合って正解を選び、間違えたペアは着席する活動を行った。

また、スティーブ・ジョブズのスピーチ音声を読み、どれだけ聞き取れたかの達成度を記入させ、「どうしたら100%聞き取れるようになるでしょうか。耳で聞いて理解できるようになれば、リスニングとリーディングができるようになります」と述べ、達成度を高める学習法を実践した。

まず、スピーチのキーワードをフラッシュカードで画面に表示し、参加者に3回ずつ単語を読ませてから、そのキーワードの日本語訳を表示して英語で答えさせた。その後、もう一度スピーチの音声を流すと、聞き取れる箇所が増えていく。さらに、スクリプトを画面に表示し、意味を考えながら文を区切って音読し、再び音声だけを聞く。参加者たちは何となく聞いたときと、ほんのいくつかのステップを踏んだだけで理解が深まったことに、まるで魔法にかけられたかのような驚きの表情を浮かべていた。そして、安河内先生は「このように、ただ音声を聞くだけではなく、達成度を実感しながら聞くことで、理解が深まり、モチベーションも上がるのです」と、参加者たちにメッセージを送った。

ペアでスピーキング活動に取り組み 論理的な主張をする問題に挑戦

続いて、今度はスピーキングとライティングの形式を本間部長が同様に問題を例示しながら解説し、安河内先生がその学習法を紹介する。再び、参加者たちはペアでスピーキング活動を体験。「プレゼンテーションのテクニックは、ジェスチャー、アイコンタクト、大きな声、リアクション。そして、笑顔です」と言う安河内先生は、英語で自己紹介をし合うよう指示した。次に、2枚の絵を画面に映し、それぞれ1枚ずつ英語で描写する活動も行い、さらに「高校生は授業中にスマートフォンを自由に使えるようにすべきか」の議題について、賛成と反対の立場を表明して、その理由を1分間で述べる活動にも挑戦した。

そして、活動を始めるにあたり「この活動はライティングの学習にも活用できます。論理的な主張をするためのルールを教えましょう。話すときも書くときも同じことが言えますが、まず立場を主張し、理由を述べ、具体的に例証するのです。スピーキングテストでは、内容の論理性を確立することが大切です」と、主張するうえでのポイントを示し、ペアで意見を述べ合った。そして、「とにかく声を出して練習し、笑顔で話すこと。できるだけ具体例を出し、黙り込まないことが大事です」とアドバイスを送った。

学びの主役は学生。

全ては学びのための改革

最後に、杉原氏が再び登壇。現在、文部科学省に申請中の広島大学の新たな取り組みとして、①情報科学部の新設、②総合科学部国際共創学科の新設、③工学部の改組、を予定していることを紹介した。国際共創学科では、授業は全て英語で開講し、日本人と留学生が共に学び合う環境を整えると言う。これもグローバル人材育成のための取り組みの1つである。「大学の学びの主役は学生です。全ては学びのための改革なのです」と強調し、「がんばれ高校生! がんばれ受験生!」とエールを送って閉会した。

スーパーグローバルハイスクール (SGH) Super Global High

第12回 島根県立出雲高等学校

高評価の指導体制「出雲モデル」で 地域・社会のリーダーを育成し続ける

2020年に創立100周年を迎える島根県立出雲高等学校は、県内最大規模の進学校であり、スーパーグローバルハイスクール (SGH) 採択1期校として2014 (平成26) 年度から活動を行っている。斬新な指導体制を組み上げ実績を積んできたことが、2016年度の間評価での高い評価につながった。同校はSGHの活動などを通して、「地域・社会のリーダーとして貢献できる人材」の育成に邁進している。

独自の指導体制が高い評価を得る

島根県立出雲高等学校は、生徒の約8割が国公立大学へ進学する、県下有数の進学校だ。リーダー的人材の輩出に対する地域の期待も高く、「地域・社会のリーダーとして貢献できる人材」の育成を目標に掲げ、2014年度よりSGH活動を展開している。SGHの採択をきっかけに「協働的な学習」や「客観的根拠に基づく思考」を重視し、課題研究への取り組みに力を注ぎ、答えの見えない課題に対して粘り強く探究する姿勢や、新たな価値あるものを生み出す創造力を育てている。

2016年9月、同校は文部科学省の中間評価において、「優れた取組状況であり、研究開発のねらいの達成が見込まれ、更なる発展が期待される」との最高評価を受けた4校のうちの1校に選ばれた。それも、公立高校としては唯一だった。高い評価を受けた理由には、課題研究に「複数の教員が関わる多角的・多面

的指導体制」というシステムを確立し、運用していることがある。これまでSGHの推進を担ってきた前・教育開発部長の竹崎先生は、「課題研究を効果的に、そしてスムーズに行うポイントは、『指導体制の構築』と『オリジナルテキストの作成』の2つにあると思います。どの学校でもできることです。必要であればぜひ活用していただきたいです」と語る。

外部講師による講座で視野を広げる

同校における課題研究は、まず普通科1年生が「SGベーシックセミナー」(理数科1年生はSSH[※]対象生徒)で、2年生から始まる課題研究の基礎を習得する。生徒は3分野10テーマに分かれ、外部講師から講義を受け、フィールドワークなどを経て、地域・社会の諸課題に関する教養を身に付ける。例えば「国際政治・経済」分野の「地方財政論」を選んだ生徒は、卵かけご飯専用の醬



英語教員の指導により、研究成果を英語で発表する準備を行う3年生

油を全国に広めた企業「吉田ふるさと村」を取材した。「村民から出資を募って起業した理由」や「雇用を増やすことへの想い」など、実際に聞いた内容をまとめて発表した。

普通科文系2年生は3つのゼミ(テーマ)10講座に分かれ(理数科と普通科理系2年生はSSH対象生徒)、約5名で1グループをつくり、研究テーマ設定から成果発表までを行う。ゼミのテーマは「国際政治・経済」「環境・エネルギー・食農」「地域文化・多文化共生」の3つで、外部指導教員の指導を仰ぎながら研究活動が行われる。しかし、研究活動を行う全ての時間帯に外部指導教員が来校するのは不可能なため、ゼミ別講義や発表会など、限られた時間帯を除いては、同校教員が課題研究を指導する。そのために構築されたのが「複数の教員が関わる多角的・多面的指導体制」だった。

※スーパーサイエンスハイスクール



前・教育開発部長 竹崎修次先生



図書館での研究活動(複数の教員による多角的・多面的指導)

School

正解のないグローバルな課題を
解決する手だてを考えられる人を育てる



3つの役割が明確な「出雲モデル」

課題研究は、1クラス内に8グループが生まれ、グループ単位で研究活動を進める。同校が重視したのは「課題研究の時間は、図書館やパソコン教室を自由に使える」ことだ。2年生全員が同時間に研究活動を行うことはできないので、クラスごとに時間をずらし、必要設備を使えるように調整した。しかし、クラス内の8グループはゼミが異なるため、教員1名だけで指導することは難しい。そこで生み出されたのが「出雲モデル」という全教員参加型の指導体制だ。

出雲モデルでは、全教員が「アドバイザー教員」「ゼミ担当教員」などいくつかの役割を分担しながら指導する。そして、クラス副担任がクラス単位の活動をまとめ、進捗管理をする（クラス管理）と同時に、ゼミ担当教員は各研究テーマを内容的にサポートする（ゼミ運営）。さらに1グループに1名のアドバイザー教員（グループ支援）が付く。加えて外部指導教員や、外部の大学教員・大学院生、外国人教員が随時来校し、生徒の研究活動を支援する。

毎週2時限の課題研究は生徒主体で行われるが、生徒がその時間でどのような目標を立て、何に取り組んだか、不明点や悩みはないかなどをポートフォリオに書いて研究活動を支援するアドバイザー教員に提出する。アドバイザー教員は担当グループの研究が円滑に進むようにサポートする。そして、「中間発表会」な

どテーマごとに研究活動に取り組む時間は、クラス単位ではなくテーマごとにグループを集め、ゼミ担当教員が担当する。また、生徒が専門家にアドバイスを求めているときなどは、アドバイザー教員が生徒からの質問をゼミ担当教員へ伝える。外部との連絡も担当ゼミ担当教員は、質問などを外部指導教員にメール等で送り、回答を得る。その回答はアドバイザー教員に下ろされ、グループに伝えられる。誰が誰にどう伝達するのか、役割が明確に決まっているため、生徒への指導も外部との連携もスムーズだ。

指導体制に合わせたテキストが重要

課題研究を指導するうえでの、もう1つのポイントが「オリジナルテキストの作成」だ。テキストのページの一部はミシン目で切り取れるようになっており、生徒は、当該ページに研究の進捗や問題点などを書き込み、切り取ってアドバイザー教員に提出する。竹崎先生は「各校オリジナルのテキストを作成するのが効果的だと思います。なぜなら、その学校の指導体制に合わせたテキストでなければ使いづらく、全員で共通認識を持つことが難しいからです」と話す。

アクティブ・ラーニングで英語力アップ

英語力向上に対しては、2年生は課題研究のサマリーを、3年生は研究成果を英語で発表するなど、英語での表現を取り入れている。また、希望者にはオンライ

ン・スピーキング・トレーニングや海外研修の機会を用意している。

さらに、教員がSGH活動を通してディベートやグループディスカッションを授業内で生かす手法を培ったことが大きく、授業内でアクティブ・ラーニング的な学びを行うことで、生徒の英語力は確実に伸びているという。そして、出雲高校の今後の課題は、このアクティブ・ラーニングの手法をあらゆる授業に取り入れていくことで、「主体的・対話的で深い学び」の意識をより引き上げていくことである。

効果はさまざまなところに表れた

実は、同校はSGHの活動を始めるまで地域との関わりが十分とは言えなかった。しかし、フィールドワークなどで生徒が地域の企業・団体や人々と接するようになり、地域との親密度が増すという、うれしい効果が生まれた。さらに、生徒が主体的に行動するようになり、校内が活性化することで部活動の成績も上がるという予期せぬ効果も表れた。2014年には、県高校総体で男女総合初優勝、また、昨年は野球部が夏の甲子園に初出場することができ、生徒にも教員にも、そして地域にも希望をもたらす出来事となった。

SGH活動を振り返り竹崎先生は、「生徒には英語力を身に付け、一度は広い世界へ飛び出してほしい。そしてグローバルな視野を持って、いつか社会や地域に貢献してくれればうれしいですね」と、目を細めた。



課題研究の成果を留学生に英語で発表



課題研究の時間は外部の大学教員や外国人教員が来校し、生徒の活動をサポート

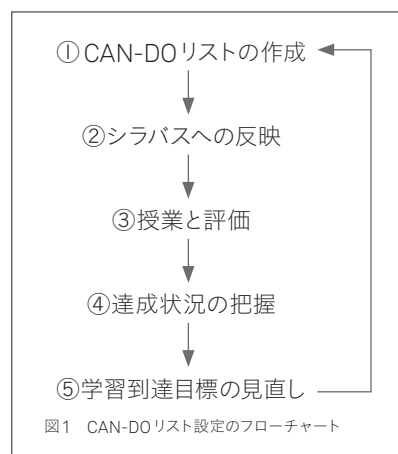
「学習到達目標と指導、

第2回

CAN-DOリストは作って終わりではない、 どのように活用すべきか

CAN-DOリスト作成から評価まで

各中学校・高等学校で求められている『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標（以下CAN-DOリスト）は、図1のような流れで設定します。



文部科学省による平成27年度英語教育実施状況調査によれば、①のCAN-DOリストの作成は、多くの学校で行われるようになってきたようです。しかし、ここで終わってしまえば、せっかく作成したCAN-DOリストを生かすことができません。そこで、活用方法を以下にまとめます。

CAN-DOリストの活用方法

(1) 目標の共有化

CAN-DOリストの活用の第一歩として大切なのが、CAN-DOリストの共有

です。1人の先生が形式的に作成し、それを他の先生に配付するだけでは、十分ではありません。『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標を本当の意味で英語科の教員で共有していくためには、作成段階から全員で取り組む必要があります。英語科の人数が多い場合は、各学年からリーダーとなる先生を選び、ワーキング・グループ（以下WG）を立ち上げます。そして、①WGで、卒業時および各学年の到達目標のたたき台作成→②英語科全員での検討→③WGで課題点を修正→④英語科全員で確認・必要に応じて再修正→⑤CAN-DOリスト完成、となります。これは作成プロセスの一例ですが、大切なことは、このプロセスのなかに英語科全員が加わり、学年にかかわらず検討を行うことです。生徒に求められる技能は年度によって大きく変わることはありませんので、教員がどの学年を担当することになったとしても、全員が合意できるCAN-DOリストにすることが大切です。この合意を形成していくなかで、学習到達目標に対する理解が深まり、意識の共有化が進みます。その結果、教員が同じ目標に向かって協力しやすい体制の構築につながるのです。

作成したCAN-DOリストを生徒・保

護者と共有していくことも大切です。生徒にCAN-DOリストを示して、目標を共有することにより、どの技能を習得するために学習を行うかが明確になり、生徒のモチベーションを高めることが期待できます。また、CAN-DOリストは、その授業をしっかりと履修すればほぼ全ての生徒が到達可能な目標です。つまり、授業の質の保証でもあるのです。CAN-DOリストを保護者と共有することにより、英語の指導に対する理解と支援を得やすくなります。教育効果を上げ、英語教育への理解を深めてもらうためにも、積極的なCAN-DOリストの公開が求められます。

CAN-DOリストの活用方法

(2) 目標の具現化

目標の共有ができれば、CAN-DOリストに定めた学習到達目標を具現化できるよう検討を行います。そのために、図1の②シラバスへの反映と、③授業と評価にCAN-DOリストを結び付けていきます。

シラバスでは、目標とされている技能を育成するために、どの単元でどのようなコミュニケーション活動が必要かを検討し、反映させます。目標とする技能と、教科書などを通して行うコミュニ



評価の「一体化」を目指して

前回の「なぜ、『学習到達目標と指導、評価の一体化』が必要なのか」では、各中学校・高等学校ではCAN-DOリストの設定は進んでいるものの、その公表や達成状況の把握など活用が十分とは言えない現状が浮かび上がってきました。今回は、CAN-DOリストをどのように活用していくかを検討します。

ケーション活動をマッチングさせながら、目標に到達できるシラバスを作成していきます。

次に、各単元でどのような授業や活動を展開していくかをより具体的に検討します。例えば、ディベート活動を行う予定の単元では、指導手順やディベートの形式などをより具体的にしていきます。

このように「『CAN-DOリスト』の形で学習目標」を達成するための方策をしっかりと計画し、具体化することで、より高い教育効果が期待できるのです。

CAN-DOリストの活用方法

(3) 評価方法の検討

CAN-DOリストでは、生徒が授業を通して「できる」ようになることを一覧形式で明示します。それらの目標に生徒が到達したかどうか確認する方法の1つが、図1③の評価です。CAN-DOリストをもとに、どの技能をどのように測るのか、評価方法を検討することも重

要な活用方法の1つです。学習到達目標とした能力をもれなく評価しているか、テストでリーディングや文法の問題が特に多いなど、評価する能力に偏りはないか（4技能がバランス良く評価されているか）、評価方法は適切かなどを事前に確認することで、バランスが良く、より妥当性や信頼性の高い評価につなげることができます。

また、CAN-DOリストを実際のテスト作成に役立てることもできます。定期テストのためのテスト細目（テストの設計図）を作る際、CAN-DOリストとのつながりを明確にすることで、より妥当性の高いテスト作成が可能になります（詳しくは、深澤（2015）を参照）。

CAN-DOリストの活用方法

(4) 次年度への反映

図1の、④達成状況の把握と、⑤学習到達目標の見直しも一連の流れのなかで非常に重要です。(3)で収集した

評価結果や、生徒・教員アンケートなどの結果をもとに達成状況を把握します。どの資料を使用して達成状況を把握するかは、事前に決め、ゆとりを持って準備しておくようにします。

それらの結果をもとに、CAN-DOリストを見直し、次年度に向けて修正を行います。特に、学習到達目標を達成できなかった場合、その原因が指導方法にあるのか、生徒の学習方法なのか、または目標設定の適切さなのかなど、詳しい分析が必要です。授業や活動を行った際に気になった点や課題となった点について記録を残しておくことで検討の際に役立ちます。分析と検討結果に基づき、次年度の学習到達目標の修正や指導方法の改善を行います。このプロセスを毎年行うことにより、学習到達目標はより適切なものとなり、指導方法も改善され、より効果的なコミュニケーション能力の育成へとつながっていくのです。

【参考文献】 深澤真. (2015). CAN-DOリストをテスト作成に生かす. 『英語教育』, 63(12), P.62-63.



深澤 真（ふかざわ・まこと）

琉球大学 教育学部 准教授。茨城県生まれ。中央大学文学部卒業。米国 Saint Michael's College 大学院修士課程、筑波大学大学院修士課程修了。茨城県立竹園高等学校教諭、茨城大学人文学部 准教授を経て、2015 年より現職。専門は主に英語教育学・評価論。



英検4級・5級で広がる 英語の世界

「4技能をバランス良く育むために」

小学校

小学校でも「読み」・「書き」が始まります。
なぜ、音声で十分に慣れ親しむことが大切なのでしょう？

2017年3月に公示された小学校の新学習指導要領では、「外国語」の「読むこと」の目標について、「活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする」と「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする」と書かれています。「音声で十分に慣れ親しんだ」という修飾部分が「書くこと」の目標にも何度も出てきますが、これがとても大事な部分です。

英語の書き言葉は、日本語の書き言葉と仕組みが違います。日本語の平仮名は、音と文字が一致しており、その計46文字を全部知っていれば、平仮名で書かれているものは全て読むことができます。一方で、英語は単語それぞれがアルファベットでつづられ、アルファベットの文字計26文字を知っていても、そのつづりを知ら

ないと英語を読むことはできません。個々のアルファベットにはそれぞれの文字の「名前」がありますが、単語としてつづられると、単語の中での文字の「読み方」があります。文字の名前と読み方は違うことが多く（例えば、bは/bi:/という名前でも/b/という読み）、読み方が複数の可能性を持つ場合（例えば、aはappleの/æ/とAprilの/ei/）もあります。このつづりの読み方のルールは「フォニックス」と呼ばれますが、1文字に対して1つの音を持つだけでなく、2文字の音（例えば、phで/f/）、あるいは3文字の音（例えば、airで/ear/）を持つ場合もあり、非常に複雑で、これらのルールを一度に学習するのは、学習者にとって大きな負担になります。特に英語の単語になじんでいない段階でこのルールから教え込むと、暗号の記憶になってしまい、言葉の学習から遠ざかってしまいがちです。

.....

小学校

まずは文字に慣れ、子供に書きたい気持ちを持たせましょう。

このような理由で、英語の場合は、音声を先に学習する必要があるのです。つまり、音声と意味がしっかり結び付いたのちに、文字のつづられ方にもなじんでいくことが大切です。音声と一緒に文字を指でなぞり、一緒に読んでいくことが英語を「読むこと」の一步です。これに慣れてきたら「書くこと」への準備が整っている段階です。音を聞きながら、その語句を空中に書いたり、お手本を見ながら写したりして、ある程度慣れたら、書く目的を設定し、書きたい気持ちを持たせてから書かせてほしいと思います。小学校では、文字指導に対して急がず、一步一步、階段を上るように組み立てていくことが大切です。

先日参観させていただいた6年生の「将来の職業」についての授業は、英語教育強化地域拠点事業を進めている小学校

だったので「書くこと」がしっかり入っていましたが、児童にはかなりハードルの高い授業になっていました。職業かるたのゲームのあと、「さあ自分の就きたい職業を英語で書いてみましょう」という先生の指示に、1人の児童は書けないうま2、3分固まってしまいました。書きたい気持ちがあっても、自分の就きたい職業がかるたゲームでは扱われておらず、英語の単語も分からず、途方に暮れてしまったのです。別の児童は、英語で聞いた音をローマ字表記で一生懸命書いていました。これは、教師が指導案の途中のいくつかのステップを飛ばして進んでしまった結果です。「書くこと」の指導については、特に手順を踏んでいくことが大切です。そして、書いたものはあとまで残りますので、間違いは必ず教師がチェックし、正しく書かせることが重要になるのです。

中学校 「授業を英語で行う」ためにすべきことは何でしょうか？

このように、小学校で英語の音声に十分に慣れ親しみ、文字にもなじんだうえで中学校に上がると、中学校では最初から4技能を扱うことができます。では、中学校でバランス良く4技能を伸ばす授業のポイントを3つ挙げましょう。

1つ目は、CAN-DO形式の学習到達目標をしっかりと立てた授業をすることです。CAN-DO形式の学習到達目標とは、「言語を用いて場面や状況、相手を意識した何らかのコミュニケーションができるようになる」ということですので、当然のことなが

ら、4技能を育むことになります。教師の一方的な文法の説明や教科書の英文の訳の解説などに時間をかけていては、コミュニケーション活動をする時間がなくなります。教師は英語で生徒に語り掛け、生徒が英語で反応するという双方向のやり取りを進めていく授業にすることによって、初めて「英語で授業をする」ことが可能になるのです。そして、学習到達目標を意識することで、生徒に4技能を使う活動をさせる時間の確保に努めるようになるでしょう。

中学校 授業は音声のやり取りをする場にしましょう。

2つ目は、音声のやり取りを減らさないことです。そのために中学校の英語教師は、小学校で子供たちが何を学んだのかを把握しながら、既習事項を引き出すつもりで英語のやり取りをすることが必要です。中学校の教科書は小学校よりも格段に英語の量が増え、「読むこと」や「書くこと」の時間が増えますが、「聞くこと」や「話すこと」を極端に減らしてしまうと、小学校からのギャップが大きくなり、中学校の授業についていけない生徒が増えるでしょう。小学校での音声の学びを生かして、しっかりと英語のやり取りをすることで、生徒も中学校の英語は小学校

の英語と連続するものとして捉え、学習意欲を持続しつつ、さらに高度なコミュニケーション能力を身に付けることができるようになります。新学習指導要領では「話すこと」の技能が[発表]と[やり取り]に分けられ、それぞれの力を伸ばすように示されています。[発表]は事前に原稿を書き、スピーチの練習をすることができますが、[やり取り]は、相手の質問に合わせて、即興的に答える必要があります。この瞬発力は短期間で付く力ではなく、日ごろから英語のやり取りをしていなければ、できるようにはならないのです。

中学校 日常生活のなかに、授業づくりのヒントがあります。

3つ目が、4つの技能を絡めていくことです。教科書本文の「読み」に入る前に、本文に関連し、中学生に身近で旬な話題を「聞かせ」たり、その話題についての「やり取り」をさせると、3つの技能を扱うことになります。「読んだ」あとに概要や感想を「書かせ」、それをペアで相互に「読み」合ってから「ディスカッションする」、といったように1つの技能で完結するのではなく、ほかの技能を絡めることで、英語の定着にも、技能の向上にもつながるのです。

中学生になると、実用英語技能検定（英検）の受験をする機会もあるでしょう。2016年度から英検4級と5級には、スピーキングテストが導入されました。このテストも単に「話す」力だけを問うのではなく、受験者は、絵の付いた面接カードの短い英文を音読した（「読んだ」）のち、面接官からの内容に関する質問や自分に

関することの質問を「聞き取って」、即興的に自分の意見を「話す」ことになります。つまり、4つの技能を絡めながら、日ごろから授業を通じて身に付けた[やり取り]の力を発揮して、応答するのです。

例えば日常生活においても、私たちは電話で聞いた内容を伝える場合、相手のメッセージを「聞き取って」、メモに「残し」、それを本人に「伝える」というように、技能を複合的に使っていますね。教科書の本文内容に応じて、授業でどのような言語活動を組み立てていくかを考えるヒントは、実は日常生活のなかにたくさんあるのです。

今回は、4技能を育むための効果的な英検4級・5級の活用例や、英検を通して広がる英語の世界について考えてみたいと思います。



川上 典子（かわかみ・のりこ）

鹿児島純心女子大学 国際人間学部 教授。専門は応用言語学、英語教育。2001年度より小学校英語活動に関わる。小学校英語関連の授業科目としては「児童英語」「児童英語演習」「児童英語教育実習」「教材開発演習」等を担当し、外国語活動を指導できる人材育成に取り組んでいる。小学校教員向け小学校英語セミナーを毎年開いている。



〔連載〕

英検2級の「壁」を

超えるための授業実践

第2回：目標に合わせた授業デザインを

日々の授業をどのようにデザインすべきか？

前回は、生徒が英検2級の壁を超えようとするのをマラソンに例えて、その「伴走者」である教員がどのように生徒をサポートすべきかについて考えました。今回は、より具体的に、生徒のコミュニケーション能力を高め、英検2級の壁を超えさせるために、どのように日々の授業をデザインすべきかについて考えます。

現行の高等学校の学習指導要領では、外国語の「目標」として「コミュニケーション能力の育成」がうたわれています。まず、この目標を「大目的」と考えてみましょう。各校の教員は、この大目的の実現に向けて、最善の手段を選択することになります。つまり、授業のどの活動も「コミュニケーション能力の育成」に寄与するものでなくてはならないのです。

実戦と練習 — 授業をコミュニケーションの場に

スポーツと同様、授業は「実戦」、つまり「実際の英語でのコミュニケーション」に必要な力を養うことを前提として、デザインされるべきでしょう。「実戦」とかけ離れた「練習」ばかりをしていると、「実戦」に必要な「力」は付きません。授業では、スポーツの「練習試合」のような実戦に近い練習をする必要があります。練習試合は「本番」ではないものの「実戦」の近似値だと言えるでしょう。英語の授業で言えば、授業そのものを「練習試合」とし、コミュニケーションの「実戦」の場とすることが理想です。

そして、「英語で英語を教える」ことによって、「練習試合」が実現されるのだと、私は考えます。英語で英語を教えると、生徒は日本語を使っている授業の場合よりも、はるかに多くコミュニケーションのための努力をすることになります。苦しみながらも「分からない」ことを「分かろう」と努力し、「伝えたい」ことを「伝えよう」と努力します。それが学習指導要領の「目標」にうたわれる「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」を可能にするのです。

「質問する力」が身に付く授業を

より実践的なコミュニケーションを学ばせる授業をデザインするにあたって、私が特に強く意識しているものに「質問する力」があります。実際の英語でのコミュニケーションの際に最も必要なものの1つは、「質問する力」ではないでしょうか？ コミュニケーションは「分からない」ところからスタートするからです。海外など外国語を使ってコミュニケーションをする必要がある場では、自ら積極的に質問しなければコミュニケーション

が始まりません。こちらが抱いている疑問を、相手が察してくれることを期待して待っているわけにはいかないのです。

しかしながら、これまでの英語の授業では、生徒たちは専ら先生の質問に「答える」ことが多かったように思います。そうした授業が、生徒たちをコミュニケーションに対して消極的にさせていなかったでしょうか？

「考える」力を育むコミュニケーション活動ー Interview Writing

ここで、生徒が英語で「質問する」力を付けるために、普段私が行っているInterview Writingという活動を一例として紹介します。生徒はペアを組み、設定したトピックについて自由に質問を作り、パートナーに尋ね、その結果を右のハンドアウトに書き取ります。ただそれだけの非常にシンプルな活動です。活動時間は3分程度から始めるとよいでしょう。書き取ったインタビューの内容は、また別のパートナーに三人称 (He / She) を主語にして伝えさせます。

この活動では、「自分で質問を作る」力が養われます。その力は、コミュニケーション上の「問い」を見つける・作り出す力でもあり、また文法的に疑問文を作る力でもあります。どちらも現実の英語でのコミュニケーションの場で大いに必要とされる力だと思います。

例えば、“Elementary School Days”というトピックを設定すると、生徒たちはそれぞれ、“What subject did you like the best?” などと、相手の小学校時代について聞いてみたいことを「考えて」質問を作り、英語で表現します。この活動は汎用性が高く、トピックを変えることによって、使わせる文法をコントロールすることも可能です。また、教科書のレッスンの内容やそれに関する事など、さまざまな題材について考え、書かせることもできます。

「考える」力は、コミュニケーションの「前提」であり、考えることができなければ、コミュニケーション自体の必要性がなくなって

Interview Writing 1
Class _____ Name _____
Write about "Your partner's elementary school days" as much as possible in three minutes.

$\frac{x}{3}$ = your word/minute
Result _____

しまいます。授業で行う活動には、可能な限り「考える」要素を盛り込むべきでしょう。それは、その活動を「面白く」することにもつながります。Interview Writingは、英語で「考えて」コミュニケーションを図る力を養うのに適しています。それは、この活動自体が実際のコミュニケーションになっているからにほかなりません。

ライティング・スピーキングの「壁」を超えるために

生徒が英検2級の壁を超えていくことをサポートするためにも、「考えて」英語を使う力を養うことは重要です。生徒にとって、英検2級が大きな「壁」となるのは、リーディングやリスニングの問題もさることながら、ライティングや二次試験のスピーキングではないでしょうか。いずれも学習者自らが「考えて」英語を作り出す力が求められ、自分の考えを伝える際に、その理由や根拠を示さなければならないからです。ライティングやスピーキングの壁を超えるためには、日ごろから、授業を通じて「考えて」英語を作り出す力を伸ばす努力がなされていなければなりません。特に、2016年度からは、合格の条件として4

技能が均等に評価され、ライティングの比重が高くなりました。日本語から英語にする、いわゆる「英作文」を練習するだけでは、生徒の考える力を育むことはできません。そのような活動は、「考える」ことを必要とする「コミュニケーション」の活動とはいえないからです。これからは、授業を実戦（コミュニケーション）の場とし、生徒が自ら「考えて」英語を使って活動するための授業デザインが必要でしょう。

今回は、「目的と手段」という観点から日々の授業をデザインすることについて考えてみました。次回は、教員が陥りやすい「失敗」の例について検証します。

「壁」を超える言葉

We learn to do something by doing it. There's no other way.

(私たちは、行動することで何かを学ぶ。それ以外の方法はない)

- John Holt

アメリカの教育学者であり、教育実践家だった John Holt の言葉です。コミュニケーションもまた、コミュニケーションの実践からしか学ぶことができません。

木村 純一郎 (きむら・じゅんいちろう)

北海道札幌国際情報高等学校 教諭。北海道足寄町出身。東洋大学文学部英米文学科卒業。1992年～93年にかけて文部省海外教育施設日本語教員派遣事業 (REXプログラム 第3期) に参加。カナダ・アルバータ州カルガリーの William Aberhart High School に勤務。2002年度より北海道札幌国際情報高等学校に勤務。全国高校英語ディベート連盟 (HENDA) 北海道ブロック代表。北海道高等学校文化連盟国際交流専門部専門委員長。





〔連載〕

全英連新潟大会に向けて

新潟から世界へ！ ～交流・喜び・成長あふれる

新潟大会 実行委員長

小野島 恵次 先生

(新潟県立高田高等学校 校長)

2017年11月22、23日に新潟県で開催される「第67回 全国英語教育研究大会（全英連新潟大会）」の開催案内が公表された。今大会のコンセプトは「新潟から世界へ！ 新潟から未来へ！ ～交流・喜び・成長あふれる英語教育の推進～」であり、「グローバルマインドを持つ自律した学習者を育成する英語教育のあり方」を示すことを目的としている。大会実行委員長である小野島恵次先生と記念講演の講師を務める太田光春先生に、大会コンセプトに込めた思いと、新学習指導要領に向けたこれからの英語の授業のあり方について語り合っていた。 (文中敬称略)

5年間で大きく変化してきた

新潟県の英語教育

小野島 今回の新潟大会では、「英語教育を通じて、子供たち自身の言葉で新潟から世界へ発信していったほしい。そのような活動が、これから求められる教育につながっていく」と考え、「新潟から世界へ！ 新潟から未来へ！」というコンセプトを掲げました。サブタイトルには、私たちがめざす英語教育の方向性を示しています。それはまず、子供同士の「交流」、子供たちと先生との「交流」、他県の人や外国の人との「交流」です。そして、「交流」を通じて自分の考えや思いが相手に伝わる「喜び」がある。さらに、子供たち一人一人が、人間として成長していくことを実践できる英語教育を推進していきたい、という思いがあります。新潟県では「個を伸ばす教育」を推進し、児童・生徒一人一人が輝き、自分の力を最大限に伸ばしていく教育をめざしています。それには、生まれ育った新潟の文化や歴史を理解し、誇りや愛着を持って世界へ伝えてほしいという願いが込められています。

太田 国がめざす英語教育の方向性をあらためて示すコンセプトであり、新潟らしさが表れていますね。

小野島 新潟県は南北に長く、上越・中越・下越だけでなく、佐渡もあり、各地で地域に根差した教育を展開しています。また、新潟県はお米の産地であり、各地域での実践をお米の粒に例えれば、その一粒一粒をふっくらと大きなおむすびのようにまとめていると考えています。

太田 小野島先生とは5年前に初めてお会いし、県内の各地の高等学校の授業を視察させていただきました。実は、初めて拝見した高等学校の授業では、過去にタイムスリップをしたかのような印象を持ちました。しかし、その後多くの先生方が新潟の英語教育を改善しようと、熱心に授業改善に取り組んでこられたのです。私はその姿を目の当たりにしてきました。新潟県は雪国で、冬は寒さの厳しい地域ではありますが、英語教育に携わる先生方は“熱い”と思います。

小野島 5年前、これから求められる英語の授業の形、そしてどのように授業を

変えていかなければならないのかというお話を太田先生から直接伺い、私は大変感銘を受けました。そして、太田先生には何度も新潟へ足を運んでいただき、何人もの先生方に直接指導をしていただきましたね。高等学校の授業実演者である根立望先生もその一人で、太田先生の直接指導を受けて、ドラスティックに授業を改善してきた実践者です。ですから、今大会の開催にあたり、記念講演の講師は太田先生以外には考えられないと依頼しました。

太田 貴重な機会をいただき、ありがとうございます。今回の講演のキーコンセプトは、「子供たちの英語によるコミュニケーション能力の育成」にあります。昨年12月の中央教育審議会の答申からも、知識・技能の習得はもちろんですが、知識・技能を活用して何をするのか、知っていることやできることを通して、子供たちが社会や世界とどのように関わり、自分の人生をどのように豊かにしていくのかが問われています。英語における知識とは語彙・文法であり、技能は4技能でしよ

新潟から未来へ!

英語教育の推進～

新潟大会 記念講演 講師

太田 光春 先生

(名古屋外国語大学 教授・前 文部科学省 初等中等教育局 視学官)



う。英語を使って何をするのか、何ができるのか。社会や世界とどのように関わり、自分の人生をどう豊かにしていくのか。先生も子供たちも理解したうえで、コミュニケーション能力の育成に努めていただきたいといったことをお話しする予定です。

小野島 学力の3要素ですね。

太田 学校教育法30条2項でも、「生涯にわたり学習する基盤づくり」の重要性を説いています。それは、①基礎的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等、③主体的に学習に取り組む態度の育成です。それでは、英語の授業で何をするのか。それは、単に知識を授けるだけではなく、子供たちに学習者としての自信を与えることです。そして、4技能の学び方を教え、学校の外で英語を求めていく子供たちを育てることです。さらに、卒業後も英語と関わりを持ちながら生活し、社会や世界とつながっていくのできる人、つまり自律した学習者を育てることです。先生方は、「英語を習得しようとする情熱を持ち、それに対して時間や労力を割き、もしくじけても、再度取り組もうとする粘り強さがなければ、英語は習得できない」ということを子供たちに伝えなければなりません。

小野島 私は常々、know howではなく、know whyが大事だと話しています。

太田先生には、なぜ授業を変えなければならないのか、英語教育はどのように変わっていくのかを各地でお話いただきました。そして、そのknow whyに感化された先生が地域の核となり、その小さな滴が波となり日本海へ広がるように、全県へと広がりつつあります。

「新潟らしさ」を生かした大会に

太田 この5年間の変化を振り返ると、小野島先生のリーダーシップは素晴らしいものでした。ですから、今大会の実行委員長が小野島先生であることは当然に思われます。英語科の先生だけが変わっても何も変わらない。校長先生や副校長先生、教頭先生も、教育委員会や教育センターの指導主事や教務主任も変わらなければと、さまざまな場でお話しする機会をいただきました。当時、県立教育センター所長であった小野島先生を中心に全県体制で改革を進め、今大会はその中間点にあたるということからも、大変意義深い大会になると思います。さて、新潟大会ならではの見どころは何でしょうか。

小野島 初日のオープニングでは、佐渡にある新潟県立羽茂高等学校の伝統芸能部の生徒たちがパフォーマンスを披露します。生徒たちは島の伝統芸能を受け継ぎ、昨年は全国高等学校総合文化祭

で文部科学大臣賞を受賞し、国立劇場で演じる機会を得ることができました。生徒たちには佐渡について英語でナレーションをするなどしてほしいと思います。

太田 新潟県は現在、佐渡金銀山の世界遺産登録をめざしていますね。

小野島 佐渡島内では子供たちが一生懸命英語で佐渡について紹介しようと取り組んでいます。そのような様子からも児童・生徒が主役であるということを強調したいと思います。また、佐渡はトキの生息地として知られ、トキは環境問題のシンボルです。残念ながら日本では絶滅し、現在は中国からお預かりしたトキを人工繁殖しています。トキは田んぼにすむドジョウを食べますが、農薬を使うとドジョウが生息できず、トキも生きていくことができません。そこで、佐渡島内の生徒たちはドジョウを養殖し、農家はできるだけ農薬を使わないようにして、トキの繁殖を支えています。このように、トキは環境問題のシンボルであり、地球規模の課題です。それこそがまさに「新潟から世界へ」という発信につながると思います。

太田 新潟は南北に長い県でありながら、均質な教育が全県で展開されていますよね。私はよく講演で、社会はオーケストラと同じだとお話しします。オーケストラは指揮者からバイオリン、フルート、シンバル…と多様な楽器で成り立っている

す。美しいシンフォニーを奏するには、お互いの演奏を尊重し、自分が求められたときには最高のパフォーマンスで返すことが必要です。つまり、異質なものを理解して尊重し、自分も受け入れられているという自己有用感を持って人と接していくことが大切なのです。子供たちは学校を卒業したのち、社会へ出て行きます。一人一人が自分の持ち味を生かして、社会貢献をするという志を持ってほしいと思います。そうした意識を育むのが学校教育の使命なのです。先生方には、英語は社会や世界とつながる窓口であり、自分の人生を豊かにする窓口であることを伝えていただきたいですね。

小野島 英語を使って社会や世界とどう関わるのか、自分の人生をどう豊かにするのかという視点が大事ですね。

教育とは子供の学びの可能性を信じることから

太田 この5年間、新潟県では、県立教育センターの指導主事が中心となって、現場の先生方とともに勉強会を続けてきました。そこに授業改善への先生方の本気度が見て取れます。授業実演者の根立先生の授業には毎回、感動させられます。しかし、皆さんにお伝えしたいのは、彼女は特別な存在ではなく、この5年間、志を同じくして全県で授業改善に取り組んできた先生方の代表として発表するということです。

小野島 分科会では郷土愛をテーマにする研究もあります。新潟県としては、地域の文化をより多くの人に英語を通して伝え、異なる文化も知ろうとすることをグローバル人材育成の根底に据えて考えています。各地域の文化や歴史、自然などを学び、発信の題材にしていけることができることは新潟県の特長ではないでしょうか。

太田 自然、文化、歴史…。新潟県には語るべきことがたくさんありますね。私が小野島先生に伺いたいのは、新潟県の県民性についてです。この5年間、新潟県の先生方と接するなかで感じたのは、皆さんがとても実直で、まじめで、英語教育の急激な変化に対しても、情熱を持っ

て粘り強く取り組んでおられるということでした。これは県民性なのでしょう。

小野島 確かに雪国という厳しい状況下で、一生懸命努力をすれば必ず報われる、春の来ない冬はないと信じてひたむきに生きていく姿勢は県民性と言えるでしょうね。なぜ授業を変えなければならないのか、教員には何が求められているのか。教員は生徒に対して、「これはできないだろう」とネガティブに見がちです。しかし、それでは生徒の「個」を伸ばすことなどできません。

太田 小野島先生の発言には子供たち一人一人を大切にするという信念が表れていますね。教育は子供の学びの可能性を信じることから始まります。知識注入型の20世紀の教育では、先生がグラウンドでファインプレーをして見せることが重要でした。生徒は観客席にいたのです。しかし、今求められているのは、生徒がファインプレーや連係プレーをすることです。ただし、生徒が好き勝手にプレーすればよいのではなく、そこには先生の意図的な営みが必要です。そのために先生は、コーチとして適切な助言をする。アンパイアとして評価をする。監督として長期的なビジョンを持ち、身に付けさせたい力について、明確なゴールを設定して采配をする。指導する側に「計画性」と「意図」があるなかでの生徒の主体的な学びなのです。

小野島 誰もが最初からスーパースターのような授業ができるはずはありません。誰もがもがき苦しむなかで、know whyを理解しなければ、授業改善はできません。目の前の子供たちが輝き、主役になるためにどうしたらよいのかを考えれば、知識注入型の授業をするべきではないということは明白です。

太田 20世紀には、難関といわれる大学に入れば、良い就職が用意され、終身雇用が保証されると信じられていました。そのため、いかに効率良く入試に対応する知識を授けるかが、先生方の腕の見せどころでした。例えるなら、フォアグラを作っていたのです。子供たちの食欲や好き嫌いに関係なく、とにかく口の中に大量に知識を入れ、結果的に多くの子供た



ちが学習に意義を見いだせなくなってしまうのです。しかし、本当の学びとは、いわば、「ポケモンGO」の世界なのです。なぜ、皆がこぞって新しいレア物のモンスターを集めに行くのか。それは、興味関心と達成感があるからです。英語の授業は、子供たちが日常生活で聞いたり読んだりした英語を使って、情報や考え、気持ちを伝え合うという活動を通して、先生や友達同士が互いに認め合う場であるべきです。それにより、子供たちはもっと新しい英語（表現）を仕入れようという気持ちになるのです。それは、興味・関心のあることに応じて自ら英語を求めていく子供たちをつくるということです。それこそが、学びの主体が先生から児童・生徒に移るということです。生徒が自ら求めなければ英語は絶対に身に付きません。

小野島 今は、コミュニケーション活動を中心とした授業が求められているのですから、英語の授業では子供たちが英語を使って活動をする必要があります。そのために教員は、目の前の生徒を見て、冷静に教科書などの適切な教材を選択すべきだと思います。従来型の文法訳読型の授業形態で、難しい題材を扱えば力が付くという誤った幻想に基づ



まま処理する機会を奪っていること」と考えるべきだと思います。生徒にとっては、英語で話すことへのフラストレーションもあるでしょう。しかし、「日本語でいいんだ」という逃げ道を見せたら、生徒は前に進むことなどできません。学びの可能性は閉じてしまうのです。実際のコミュニケーションの場面で英語を聞くとときに、その都度日本語に訳している時間はありませんよね。私たちは自分が聞き取れた音や分かる文字を通して意味内容を理解していくのであり、そこには推測する力が求められます。日本語を介在しなければ深い学びができないのではありません。教材が難しければ、内容を理解するのに大半の時間を要してしまい、学びを深めることはできません。易しい言語材料でも深く学べるものをトピックとして言語活動をさせることが大事だと思います。

新学習指導要領に向けてすべきこと

小野島 新学習指導要領は、現行の学習指導要領のコンセプトからの延長線上にあると思います。これからの課題は、評価のあり方ではないでしょうか。評価が変われば、授業も変わり、子供たちの学び方も変わります。信頼性と妥当性のある英語外部検定試験には、評価の面でのノウハウがあります。また、ALTをはじめとするネイティブの人たちは本国でそうした評価の経験があります。そして、体育や芸術の先生たちはすでにパフォーマンス評価をしています。英語科教員は、そうした外部検定試験やネイティブ教員、体育や芸術科目の先生から評価のあり方を学ぶ必要があります。それを積み重ねていく必要があるでしょう。それができれば、加速度的に授業改善

は進んでいくと思います。

太田 現行の学習指導要領のもとで、英語の授業がずいぶん変わりました。公表当時は、英語で授業をしている先生は数パーセントに過ぎませんでした。今では5割に到達しようとしています。およそ2人に1人は、子供たちのために英語を使って授業を進めているのです。これは大きな変化です。新学習指導要領はこの延長線上にあり、今後は子供たちが使う英語の質が問われ、そのためにどのような授業をするかが課題となるでしょう。世界でも日本人は英語が苦手と言われてきましたが、いつまでもこの評価でよいはずがありません。これまで進めてきた英語教育改革を通じて、全国の先生方が一生懸命、授業改善に取り組んでいらっしゃいました。今後は、世界の高等学校卒業時の英語力の目標がCEFRのB1、B2であるなら、日本も小・中・高が連携して、それをめざすべきだと思います。もちろん学校により条件が異なるため、一律に目標設定はできませんが、そこまで英語力を高めていくのだという気概は持っていただきたいと私は思います。その意味では、この新潟大会が1つの起爆剤になってほしいと思っています。

小野島 子供たちが授業を通じて成功体験を積み重ね、「英語って面白い」、「自分の考えを人に伝えるって面白い」、「友達の考えを知って面白い」と感じる大切であり、今大会はさらに次のステップへとつなげていく大会にしたいと思います。そして、新潟県に来ていただければ、美味しいお米とお魚、お酒を堪能していただけます。ぜひ、奮ってご参加ください。お待ちしております。

いて、その基準で選んだ教材を使ってコミュニケーション活動をしようとするから、ギャップが生じるのです。難しい教材を使うと子供たちが理解できているかが心配になり、教員は日本語を使って説明してしまいます。しかし、教員が日本語を使った瞬間に、子供たちの思考は日本語のチャンネルになってしまいます。教員に求められている英語力とは、難しい単語や内容を、いかに子供たちが理解できる英語に言い換えて説明できるかということではないでしょうか。

太田 そうです。日本語で説明しなければならぬ段階で、教材が適切ではないということですね。日本語で説明すれば生徒が理解できたと思うのは誤解です。「日本語にしてあげる＝英語を英語の

第67回 全国英語教育研究大会（全英連新潟大会）

「新潟から世界へ！ 新潟から未来へ！ ～交流・喜び・成長あふれる英語教育の推進～」

第1日 平成29年11月22日（水）新潟市民芸術文化会館「リゅーとびあ」（〒951-8132 新潟県新潟市中央区一番堀通町3-2）

第2日 平成29年11月23日（木・祝）「朱鷺メッセ」新潟コンベンションセンター（〒950-0078 新潟県新潟市中央区万代島6-1）

基調講演：太田 光春 先生（名古屋外国語大学 教授・前 文部科学省 初等中等教育局 視学官）

授業実演：村上 大樹 先生（新潟市立上所小学校）／中川 久幸 先生（新潟市立小針中学校）／根立 望 先生（新潟県立新発田高等学校）

分 科 会：26テーマ（小学校4、中学校6、高等学校13、小・中・高連携3）を予定

詳しくは、新潟県高等学校教育研究会（高教研）英語部会（<http://www.kokyoken.nein.ed.jp/>）・全国英語教育研究団体連合会（全英連）事務局（<http://www.zen-ei-ren.com/>）

平成28年度 実用英語技能検定 成績優秀者・優秀団体表彰式を開催

今年3月27日、東京都港区のANAインターコンチネンタルホテル東京にて

「実用英語技能検定（英検）成績優秀者・団体表彰式」が開催された。

平成28年度の第1回から第3回検定において、特に優秀な成績を収めた個人と団体が表彰され、全国から集まった受賞者たちはお互いの努力と栄誉をたたえ合った。



米・加・英の駐日大使から 寄せられるメッセージの数々

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は毎年度末に「英検 成績優秀者・優秀団体表彰式」を開催し、その年度中に実施した第1回から第3回検定の成績優秀者と優秀団体を表彰している。表彰式では米・英・加・豪の駐日大使賞などが授与され、各国のプレゼンターが列席し、祝辞を述べる。

冒頭でまず、ジェイソン・ハイランド駐日アメリカ合衆国臨時代理大使から寄せられたビデオメッセージが上映された。「英語はチャンスの扉を開ける鍵です。世界中の人たちとつながり、共に明るい未来を築くことができます。英語習得への一番の近道は英語の環境に浸ることです。ぜひ、留学をして英語力に磨きをかけてください。昨年は100万人以上の外国人がアメリカの大学へ留学しました。皆さんも留学生の仲間入りをしてください。米国人や世界各国の留学生と生涯にわたる友情を育み、一流の教授陣か

ら学ぶことができます」と、英語習得の重要性和アメリカ留学を投げ掛けた。

続いて、パトリシア・オックウェル同参事官が登壇し、イアン・バーニー駐日カナダ大使のメッセージを代読し、今年で建国150周年を迎えるカナダを訪れ、多様性や多文化に触れることでグローバルな視野を身に付けること、カナダ留学はそうした機会になることなどを述べた。また、マット・バーニー駐日イギリス大使館文化参事官が読み上げたブリティッシュ・カウンシル駐日代表のメッセージでは、2020年度の大学入試改革について言及。英検をはじめ、ブリティッシュ・カウンシルと英検協会が共同運営するIELTSは、4技能を測る試験として、今後の大学入試の4技能化においても重視されていることなどを紹介した。

言葉や行動力で人の心を動かし 社会を変えていく人に

そして、プログラムは個人賞と団体賞の表彰へと移る。英検協会では、平成

27年度より、選考基準は下表の通りだ。

一連の表彰が続くなか、「文部科学大臣賞（個人の部）」の発表を前に、中学生で英検準1級、大学生で英検1級を取得し、現在はライフネット生命株式会社の代表取締役社長を務める岩瀬大輔氏が登壇。「言語は手段に過ぎません。言語がいくら堪能でも、人の心を動かすことができれば、社会を変えることはできません。ぜひ日本を代表するリーダーとなり、言葉や行動力を通じて人の心を揺さぶり、行動を起こし、社会を変えていく人になってください。そして、そのためには世界で今、何が起きているかを理解し、自分なりの強いメッセージを発信できる人になってほしいと思います」と、個人受賞者・団体へ応援メッセージを送った。

全国から集まった受賞者の 努力と栄誉をたたえる

最後は「文部科学大臣賞（個人の部）」の発表となった。受賞者は事前に

	個人の部	団体の部
生涯学習奨励賞	年間を通し、英検 CSE スコアが最も高かった60歳以上の方	
米国大使賞	英検 CSE スコアが最も高かった大学生・短期大学生	英検の受験率（受験者数÷在校生数）が最も高かった団体
ブリティッシュ・カウンシル駐日代表賞	英検 CSE スコアが最も高かった高校生	英検の取得率（英検取得者数÷在校生数）が最も高かった団体
カナダ大使賞	英検 CSE スコアが最も高かった中学生・小学生	英検の受験率伸長率（今年度受験率－前年度受験率）が最も高かった団体
オーストラリア大使賞	英検 CSE スコアが最も高かった教員	英検の受験者数が最も多かった団体
日本商工会議所会頭賞	英検 CSE スコアが最も高かった社会人	
日本英語検定協会賞	【奨励賞】過去10年間で1級を3回以上合格し、平成28年度の英検 CSE スコアが上位3名 【特別賞】過去10年間で5級から1級までの全ての級に合格し、平成27年度の英検 CSE スコアが上位3名 【4級満点賞】4級の試験で満点を取った方全員 【5級満点賞】5級の試験で満点を取った方全員	先進的な取り組みをし、日本の英語教育の向上に多大な貢献をした団体 【高等学校の部】 【大学の部】 【企業の部】
文部科学大臣賞	米国大使賞、ブリティッシュ・カウンシル駐日代表賞、カナダ大使賞、オーストラリア大使賞、日本商工会議所会頭賞の受賞者の中から、最も英検 CSE スコアが高かった方	英検の合格者数が最も多かった団体



発表されておらず、表彰式場で発表される。この賞は、すでに表彰されている「米国大使賞」「ブリティッシュ・カウンシル駐日代表賞」「カナダ大使賞」「オーストラリア大使賞」「日本商工会議所会頭賞」の受賞者のうち、最も英検CSEスコアが高かった方に贈られるものだ。

司会者が手にした封筒には、受賞者の名前が記された書面が入っている。緊張感が漂う会場。一瞬の静寂ののち、1級から3級まで5名の受賞者名が読み上げられると、会場は割れんばかりの拍手に包まれた。壇上に並んだ受賞者たちは「まさか自分が選ばれるとは思っていなかったの、とてもうれしい」「将来は国連職員か外交官として、世界と日本の架け橋になりたい」などと、受賞の喜びや将来の夢について力強く語っていた。

プレゼンターを務めた文部科学省生涯学習政策局 生涯学習推進課 民間教育事業振興室の伊佐敷真孝室長は、「2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控え、わが国では英語の重要性がさらに高まり、多様な文化背景を持つ人々と交流し、協働する機会が増えています。英語を学ぶということは、外国の文化を学ぶことであり、新たな視点から日本や日本語についても学ぶことになります。皆さんには、わが国の文化を世界へと発信し、世界と日本の架け橋となっていきたいと期待を寄せています」と呼び掛け、表彰式は幕を閉じた。

平成28年度優秀団体
「米国大使賞」受賞

熊本県立八代高等学校・八代中学校

校長 山本 朝昭 先生



中・高校生の英検全員受験は言語能力の向上の手段の1つ

本校では言語能力の向上を重視し、その手段の1つとして、中学生と高校生の英検全員受験を実施しています。英検の良さととは、5級から段階を追ってスモールステップで達成感を味わうことができることにあります。本校では中学1年生から高校3年生まで各学年で目標級を設定し、それを上回る結果が出ています。例えば中学3年生で準1級に合格した生徒は、受験前に、合格できる自信がないので全員受験でなければ受験しないと言いましたが、結局は合格することができたのです。そして、このような生徒の、ほかの生徒への波及効果は大きいと思います。昨年から中学生は英検2級以上、高校生は準1級以上に合格した生徒を始業式や終業式で表彰するようにしたところ、続々と

合格者が現れました。こうして、目に見える形で成果が上がり、全員が一步先の英語力を身に付けることができています。

現在、本校ではグローバルリーダーの育成をめざして、即興型の英語ディベートと英語ビブリオバトルに取り組み、語るべき内容と発信力の両方を高めるためのプログラムを進めています。グローバルリーダーとは、世界のどこにいても活躍し、どのような文化背景を持つ人とも協働することができる人と捉え、言語能力に加えて人間性も高める教育に取り組んでいます。今後も英検を活用しながら、軸足は故郷にありながらも、グローバルな視野を持った人材の育成に取り組んでいきます。

平成28年度優秀団体
「カナダ大使賞」受賞

福島県 富岡町立富岡第一中学校

村上 榮子 先生



県や町の支援のもとで英検全員受験に取り組む

東日本大震災以前の富岡町には、第一小学校、第二小学校、第一中学校、第二中学校の4校がありました。震災により全町民が避難となり、震災から半年後の9月1日、三春町の工場跡地にて4校と幼稚園の共同学校「三春校」として教育を再開しました。生徒たちは現在スクールバスで1時間以上かけて通学したり、仮設住宅から通学したりしています。本来は学校ではない建物を校舎として使用しているため、施設・設備としては不十分ながらも、県の予算から英検受験料補助を受け、町から支給されているパソコンやデジタル教材を活用して、英検受験に取り組んできました。生徒18名という少人数の良さを生かし、英語科教員2名と常駐のALT1名で、昼休みなどの空き時間を使って、一人一人に手厚く指導

しています。中学校卒業までに3級全員合格をめざし、3年生は3級・準2級に4名が挑戦し、第3回までに全員が合格しました。2年生も3級・準2級に2名が合格し、第3回では2級に挑戦するなど、意欲的に取り組んでいます。

授業では、生徒ができるようになったことを褒め、フィードバックすることを心掛けています。避難生活が続き、自分の将来をイメージしづらい状況下で、生徒たちが自信を持って進学し、社会に出ていく手助けをしていきたい。また、全国の方や町、県からの支援によって学ぶことができていくことへの感謝の気持ちを忘れずに、卒業後は、自分の力で広い世界に飛び立ち、社会に貢献できる人になってほしいと願っています。



2016年度 英検協会 英語教員海外研修

帰国後の取り組み報告



「英語教員の英語力や指導力、資質向上」を目的として、公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は毎年夏期に教員海外研修を実施している。2016年度からは公募選考制となり、小・中・高等学校ともにオーストラリアのニューサウスウェールズ大学（UNSW）への派遣となった。36名の参加者たちは、研修にあたりどのような課題を持ち、16日間にわたる研修で何を学び、その成果を現在どのように生かしているのだろうか。研修の意義や内容と、参加者から寄せられた帰国後の実践報告を連載する。

校種別プログラムと合同プログラムで 理論と実践の両面から学ぶ

16日間にわたって実施された2016年度の教員海外研修。そのカリキュラムは現行の学習指導要領に沿って編成され、小・中・高等学校のいずれも、次の5つの要素から構成されている。

- ① Language Teaching Methodology
- ② Language Analysis and Input
- ③ Language Enhancement / Australian Studies
- ④ Practical Component
- ⑤ Managing Teaching and Learning

(Lower and Upper Secondary only) / Teaching Young Learners (Elementary only)

参加者たちは校種別プログラムと合同プログラムで学び、授業は全て英語で行われた。小学校独自のプログラムでは、児童がコミュニケーション能力を伸ばしていくための理論と実践、教材選びなどについて学んだ。中学校や高等学校では、学級経営をはじめ、JETやALTの有効活用、生徒の間違いへの指導法などを学んだ。また、合同プログラムでは、教員の英語力向上や指導力向上の

ための知識や技術、オーストラリアの文化理解などを学ぶほか、実際に現地の小・中・高等学校を訪れて授業を見学する機会も用意されていた。

研修を終え、指導にあたったUNSWの教授陣からは「参加者は皆、教員としての優れた資質を持っていた。小学校の先生は英語力が高く、どのような場面でも積極的に取り組もうとする姿勢は素晴らしかった。中・高等学校の先生も英語力をはじめ指導力などレベルが高かった」と称賛の声が上がっていた。

REPORT

高等学校

受け身の姿勢を招く授業からの脱却

兵庫県立尼崎小田高等学校 教諭 中安 真敏



研修で学んだこと

英文読解に対して生徒が主体的に取り組み、内容が定着しやすくなるためには、生徒のやる気をいかに引き出すかを第一に考えることが必要だと学び、授業の工夫に取り組んでいます。黒板で文法説明や日本語訳をし、それを生徒がノートに書き写すという受動的な授業形態を刷新し、リスニング活動を中心とした授業を実施しています。

研修後の取り組み

① ICT 機器の活用で生徒は注目

生徒が受け身になりがちな板書での授業から脱却するために、ICT機器を活用する授業形態を取り入れた。

スクリーンやスライドを使用することで、生徒が注目するようになった。また、常に生徒の表情や反応を見ながら授業ができ、生徒の理解度も把握しやすくなった。

② さまざまなリスニング活動で英文の概要をつかませる

研修で学んだ、Teaching Listening Skillsの要素を取り入れた3つのリスニング活動を実施した。

(1) Pre-listening tasks: 生徒の興味を引き出すための導入。フラッシュカードなどを用いて理解の鍵となる語彙を紹介。

(2) While-listening tasks: 概要確認問題で生徒の理解度を測るほか、ペアでのシャドーイングやリピーティングを実施。

(3) Post-listening tasks: 英作文などで文法事項を簡潔に確認したり、内容に関する自分の意見を英語で表現したりする。特にペアワークにおいては、活動における自身の達成度を互いに確認することができるため、生徒たちはより真剣に取り組むようになった。

今後の抱負

生徒へのアンケートでは、英語力の向上を実感している声もあり、一定の成果を感じています。今後は、自発的に英文を理解しようとする態度の養成と、英語学習に対するモチベーションの向上のための工夫を施し、さらなる授業の発展に尽力していききたいと思います。



学習意欲と自己肯定感を育む授業

大阪府 寝屋川市立第七中学校 教諭 今森 萌

研修で学んだこと

学習内容の定着のためには、その言語がどのような場面で使われるのか、というコンテキストを生徒に与えることが重要であり、ライティング活動においては、生徒のモチベーションを上げるために、身近でオーセンティックな教材の提示が必要であるということを学びました。

研修後の取り組み

①コンテキストを意識した文法指導

ALTとのスキットやタスクベースのインタビュー活動を取り入れた。

導入時での「Is this〜?」という疑問文を活用する場面設定でのALTとのスキットや、疑問詞「Where」のパターンプラクティスのためのインタビュー活動など、疑問文の具体的な使用場面を与えることで、生徒は以前よりも英語を「使って」意欲的に活動に取り組むようになった。また、文法事項の復習の際には、導入時の場面の再現のみで、日本語を介さずに学んだ表現を思い出していた。

②身近でオーセンティックな教材提示によるライティング指導

登場する文法項目に沿った、身近なテーマでのライティング活動を取り入れた。

中学1年生の2学期には三人称単数現在形が登場するので、「This is my pet」というテーマで、グループ内でのスピーチ活動からライティング活動へとつなげた。その後の定期テストでは、「迷子のペットを探すためのポスターを描きなさい」という設問で、自己表現問題を出題したところ、9割の生徒が何かしらの解答をしていた。また、スピーチ活動では、生徒はクラスメイトの発表をよく聞き、語彙力の拙い生徒でも、知っている単語をつないで発表する様子が見られた。

今後の抱負

生徒の学習意欲をそがないためにも、今後は帯活動における反復練習などで学習内容の定着率を高め、生徒が成長を感じることで活動内容を展開していきます。そして、生徒が自信を持ってアウトプット活動に取り組むことができるように、教材提示の方法だけでなく、語彙や文法などについても、スモールステップで指導していくことを意識したいと思います。



「もっと英語を勉強したい」と感じる授業

栃木県 鹿沼市立西小学校 教諭 広瀬 文彦

研修で学んだこと

研修を通して、児童が主体的に英語を学ぶようになるためのヒントを数多く得ることができました。そのなかでも、①正確さよりも流暢さ ②児童の日常と密接に関係する本物の教材を使用する ③授業と実際の生活を関連付ける ④コミュニケーションの必然性を持たせる という4点を軸に取り組みたいと考えました。

研修後の取り組み

①複数回の双方向コミュニケーションで興味を抱かせる

児童の答えに担任が反応を示したり質問を返したりしながら、複数回の双方向コミュニケーションを意識した。

4年次の単元「数字に親しもう」では、導入時の教師と児童のインタラクションの場面で、英語であいさつを交わしながら、複数回の双方向のコミュニケーションを意識した。それにより、発表している児童だけでなく、ほかの児童もすすんで英語を聞くようだった。また、担任と児童との日常の関係性が反映したりリアル・コミュニケーションにもつながった。

②小学校教員が特別な意識を持つことなく取り組める英語活動

研修で学んだことを「鹿沼市外国語活動ハンドブック」作成や、教務主任会ブロック研修会で取り入れた。

「鹿沼市外国語活動ハンドブック」の作成では、英語が専門ではない小学校教員がT1で実施する外国語活動に特別な意識を持つことなく、他教科や領域と同じように授業を進めることができる資料の作成に取り組んだ。また、教務主任会ブロック研修会では、2020年度からの高学年での教科化や中学年への外国語活動の導入についての情報交換に加え、実践例を示すことで、今後、各校の足並みをそろえて取り組んでいけるようにした。

今後の抱負

数字を学ぶ際の言語活動は単調になりがちなので、児童が示した好きな数字の理由をほかの児童に考えさせるなど、インフォメーションギャップを利用したコミュニケーション活動に取り組んでみようと考えています。また、ハンドブック作成や研修会などの、授業以外の場においても、小学校教員の外国語活動へのサポートや、各校との連携についてより一層の努力をしていきたいと思っています。



わたしのオススメ本

英語教育に携わる皆さんにオススメの書籍をご紹介します。

今回は、CLASS REPORTで取材に訪れた学校の先生方から、明日からの授業づくりに役立つ書籍をご推薦いただきました。

1 『はじめての小学校英語 授業がグッとアクティブになる! 活動アイデア』

江尻 寛正 (著)
明治図書出版 定価(本体2,000円+税) 2017年3月刊行



沖縄県 宜野湾市立大山小学校
上江洲 育子 先生

本校では、授業導入時に「First Activity 英語脳へスイッチオン」として、ジングルやTeacher Talk、クイズ等の帯活動を取り入れています。特に高学年の児童は知的好奇心を揺さぶられる活動を好み、人とつながることで外国語を学ぶ意欲を高めています。この本には、短時間学習(帯活動)でのアクティビティやコミュニケーション能力を高める活動が紹介されています。今号P.14にて掲載の単元「Hello, Friends!」では、自分の名前を書く活動の前に、本書P.96の「誰の名前?」の活動を参考に考案した、友人の名前を当てる「What is this name?ゲーム」を取り入れました。ねらいとしては、①スペルを意識する、②のばす音等ローマ字との違いを知ることになりますが、児童にとっては友人の名前を当てることでお互いの心が「ほんわかする」という活動になりました。新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」に沿った授業づくりや、「楽しい」だけでなく「思考する場面」「思いを伝える場面」を意図的に取り入れる授業づくりに役立つ1冊です。

2 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』

村野井 仁 (著)
大修館書店 定価(本体1,600円+税) 2006年4月刊行



栃木県 真岡市立大内中学校
村上 正行 先生

現在、全国で英語授業力向上研修が行われておりますが、その研修とセットで読んでいただきたい1冊です。私がこれまでに読んだ中で一番大切に読んだ1冊で、授業デザインのバックボーンとなっています。私には英語教師になったその日からずっと思い描いてきた授業があります。「英語というツールの使用を通して、生徒のwhole personalityを育てる授業」です。言語や文化、あるいは他者と触れ合う経験を通して、生徒の全人格的成長を促すような英語教育を進めたい方には特におすすめです。内容は第二言語習得研究についての理論が中心ですが、実践を強く意識しているため読みやすく、指導法や学習法をデザインするための背景知識を与えてくれます。例えば「対話することはなぜ大切なのか」や「英語指導において何を育てるのか」など、英語教育の根本について分かりやすくまとめられています。多くの教師が直感的に行っている行動に「意味」と「意識」を与えてくれます。きっと、英語教師としての人生が変わる1冊になると思います。

Present!

本コーナーでご紹介した書籍を読者の皆様へプレゼントいたします。

ご希望の書籍の番号と下記の必要事項をご記入のうえ、P.55のFAX申込用紙またはEメールにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

- ① 氏名 ② 所属(勤務校名)・役職 ③ 連絡先(住所、電話番号、メールアドレス) ④ ご希望の書籍番号
⑤ 今号で興味深かった記事とその理由 ⑥ 今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見

抽選で各1名様にご希望の書籍を差し上げます。皆様からのご応募をお待ちしております。

応募締切

2017年9月30日(土)

応募方法



03-5439-6879



eigojoho@morecolor.com

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

わたしのオススメ本プレゼント
FAX 申込用紙

英検 英語情報編集部宛



03-5439-6879

P.54でご紹介した書籍のうち、ご希望の書籍の番号に○をして、下記の必要事項をご記入のうえ、FAXにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

ご希望の書籍のいずれかに○印をご記入ください。

1 『はじめての小学校英語 授業がグッとアクティブになる! 活動アイデア』	2 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』
--	--------------------------------------

氏名	(氏) フリガナ	(名) フリガナ
	様	
所属	勤務校名	役職
連絡先	住所 □□□-□□□□ 都 道 府 県	
	電話番号	

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

1. 『英語情報 夏号』で興味深かった記事は何ですか? 該当するものの番号に○をつけてください。(複数回答可)

- | | |
|--|--------------------------------|
| 1. NEWS&TOPICS | 10. SGH「島根県立出雲高等学校」 |
| 2. 特集「英語教育推進リーダー中央研修 その成果と課題」 | 11. 「学習到達目標と指導、評価の一体化」を目指して |
| 3. 特集事例 CLASS REPORT | 12. 英検4級・5級で広がる英語の世界 |
| 4. 英語で授業7つの鉄則 | 13. 英検2級の「壁」を超えるための授業実践 |
| 5. 新教育課程に向けて | 14. 全英連新潟大会に向けて |
| 6. 大学入試改革について | 15. 平成28年度英検成績優秀者・優秀団体表彰式 |
| 7. TEAP Hot News! 「第7回 TEAP 連絡協議会レポート」 | 16. 2016年度英検英語教員海外研修「帰国後の取り組み」 |
| 8. TEAP 利用入試 座談会 | 17. わたしのオススメ本 |
| 9. 広島大学進学ガイダンス&安河内先生特別講義 | |

2. 上記の記事が興味深かった理由がありましたら、記事の番号とともにご記入ください。

3. 今後、本誌で取り上げてほしい内容やご意見がございましたらご自由にお書きください。

Cover Photo:

宜野湾市立大山小学校 教諭 上江洲 育子
 真岡市立大内中学校 教諭 村上 正行
 沖縄県立小禄高等学校 教諭 グレイ 雅美
 秋田県立秋田南高等学校中等部 教諭 吉澤 孝幸

編集後記

今号では、2014（平成26）年度から実施している「英語教育推進リーダー中央研修」の成果と課題について特集を組みました。国が進める「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、教員の指導力向上は大きな柱とされています。「英語教育推進リーダー中央研修」はその一環であり、今後は各都道府県が「英語教育推進リーダー」をどのように人材活用していくのかがカギとなるでしょう。編集部は中央研修での学びを自身の授業で実践し、地域へと広げている英語教育推進リーダーたちを各地に訪ねました。新学習指導要領へと移行していくなかで、英語教育推進リーダーから地域、学校へと授業改善の波が広がり、英語教育改革がさらに進んでいくことに期待をしています。編集部では今後も、英語教育改革や大学入試改革に関する情報などを発信してまいります。誌面へのご要望をぜひ編集部へお寄せください。

『英語情報』編集部一同

英語情報 2017 夏号

2017 年 7 月 1 日発行

発行 公益財団法人 日本英語検定協会
 総務部 総務課
 〒162-8055
 東京都新宿区横寺町55

編集統括 株式会社モアカラー
 アートディレクション・制作 株式会社モアカラー
 印刷 日新印刷株式会社
 製本 有限会社穴口製本所

©無断転載、複製を禁じます。
 ©2017 公益財団法人 日本英語検定協会

英検試験問題と解答のウェブサイト公開のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会は、より広範な情報公開と、サービスの質的向上を図るべく、一次試験問題を英検ウェブサイトにて公開するサービスを行っております。一次試験日から約1週間後に問題を提供いたします。英検ウェブサイトのURLは、下記の通りです。

英検試験問題 <http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/>

一次試験の「解答速報」は、毎回一次試験日の翌月曜日13時以降に英検ウェブサイトにて公開いたします。

英検解答速報 <http://www.eiken.or.jp/eiken/result/>

本誌について

お問い合わせ先 英検サービスセンター TEL 03-3266-8311

本誌は以下、英検ウェブサイトよりPDFにてダウンロードしていただくことが可能です。
<http://www.eiken.or.jp/eiken/group>

お問い合わせ電話案内

電話番号はお間違えないようお願いいたします。

● 英検申込受付に関すること (出願、検定料など)	英検サービスセンター	(個人) 03-3266-8311
● 英検受験に関すること (受験票、会場、合格通知など)		(団体) 03-3266-6581
● 英検 Jr. に関すること	英検サービスセンター	(英検 Jr.) 03-3266-6463
● 研究助成に関すること	英語教育研究センター	03-3266-6706
● BULATS に関すること	BULATS 事務局	03-3266-6366
● IELTS に関すること	IELTS 事務局	03-3266-6852
● TEAP に関すること	TEAP 運営事務局	03-3266-6556
● 英検留学に関すること	英検留学情報センター	03-3266-6839
● 通信講座に関すること	通信教育課	03-3266-6521
● その他のお問い合わせ	英検サービスセンター	03-3266-8311

※全国の英語教育に関する研究会、セミナーなどのウェブへの情報掲載については、英検のウェブサイトのフォームよりお申し込みください。

2017年度 実用英語技能検定 試験日程

2017年度より二次試験を2日間（「A日程」、その1週間後に「B日程」）設定いたします。

一定の条件によりA、Bいずれかの日程を指定します。詳しくは英検ウェブサイト (<http://www.eiken.or.jp/eiken>) をご覧ください。

第1回検定

申込受付 3/10金～5/12金 協会必着

【書店締切：5/8日】

一次試験 (筆記・リスニング) 6/4日

準会場 6/3日・4日

中学・高校のみ 6/2日

二次試験 (面接形式のスピーキング) A日程 7/2日 B日程 7/9日

第2回検定

申込受付 8/7日～9/15日 協会必着

【書店締切：9/8日】

一次試験 (筆記・リスニング) 10/8日

準会場 10/7日・8日

すべての団体

中学・高校のみ 10/6日

二次試験 (面接形式のスピーキング) A日程 11/5日 B日程 11/12日

第3回検定

申込受付 11/21日～12/20日 協会必着

【書店締切：12/13日】

一次試験 (筆記・リスニング) 2018/1/21日

準会場 1/20日・21日

すべての団体

中学・高校のみ 1/19日

二次試験 (面接形式のスピーキング) A日程 2018/2/18日 B日程 2018/2/25日

※4級・5級のスピーキングテストの受験日は、申し込まれた各回次の一次試験合否閲覧日から受験が可能です。各回次の二次試験日（1級～3級）から約1年間ご受験いただけます。
 詳しくは英検ウェブサイト内4級・5級スピーキングテスト特設サイト (<https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/4s5s/>) をご覧ください。

TEAP利用で、 入試が変わる

高校2年生
以上対象

受験のチャンスは
年3回
(7月、10月、12月)

**複数学科に
出願可能**

※出願基準点等の条件は
各大学にお問い合わせ
ください。

TEAPを受験して
合格に近づこう!



TEAPを利用した入試とは、各大学が実施する英語の試験ではなく、事前にこのアカデミック英語能力判定試験 (TEAP) を受験し、各大学で設定しているTEAPの出願基準点をクリアしていれば、本番では英語の試験は受けなくてもよいというものです。

「大学教育レベルにふさわしい英語力」を
正確に測定する英語能力判定試験

TEAP
Test of English for Academic Purposes

グローバル×IT社会を牽引する
思考力・判断力・表現力をリアルに測定する
英語4技能を超えたテスト

TEAP CBT

- 第1回 9月3日(日)
申込期間: 6月22日(木)～8月9日(水)
- 第2回 10月22日(日)
申込期間: 8月14日(月)～9月28日(木)

詳しくはウェブサイトで
<http://www.eiken.or.jp/teap/cbt/>

2017年度 試験日程・申込期間

第1回

7月22日(日) 実施

受付終了

5月15日(月)～6月29日(木) ※

第2回

10月1日(日) 実施

申込期間

7月24日(月)～9月7日(木) ※

第3回

12月3日(日) 実施

申込期間

9月25日(月)～11月9日(木) ※

※コンビニ・郵便局ATM支払による申込は、試験申込締切日より約2週間前に締切ります。ご注意ください。詳しくはTEAPウェブサイトへ

お問い合わせ

公益財団法人 日本英語検定協会 英検サービスセンター TEAP運営事務局
TEL. 03-3266-6556 ※平日9:30～17:00(土・日・祝日を除く)

詳細・サンプル問題はここから
<http://www.eiken.or.jp/teap/>

